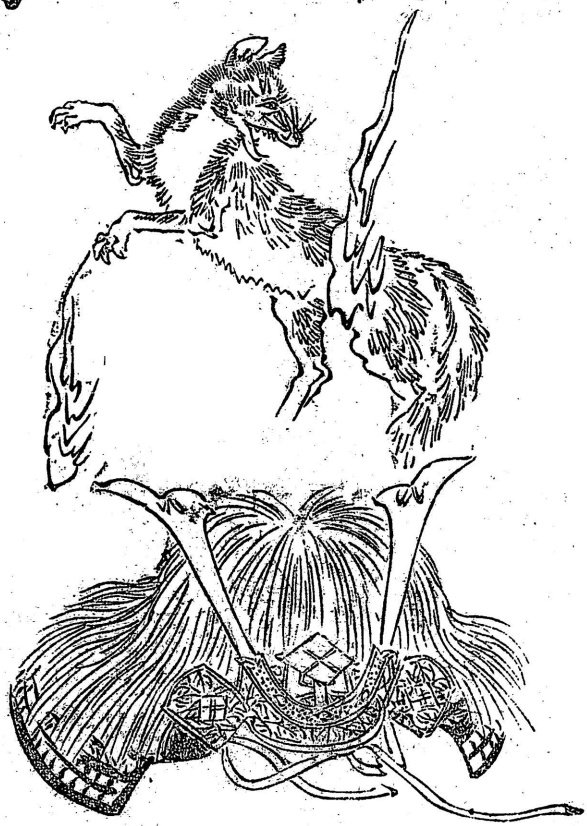
本朝世四孝



金楊堂藏板

正價金四十錢

本書ハ故眞勢中州先生ノ易傳ヲ主トシ其他諸大家ノ說ヲ折衷シ易學ノ秘蘊ヲ網羅シ平易簡明ニ說述シ應用上復遺憾ナカラシム夫ノ從來卦爻ノ辭ヲ舉ケテ單ニ之ガ解釋ヲ下ス者ノ比ニ非ズ請フ此ノ種ノ著述ト同一視セサランコトヲ

呑象　高嶋嘉右衛門君題字

易學秘傳

和裝　全二冊

嬪可　柳田幾作先生著

郵稅金八錢

武田信玄
長尾謙信

本朝廿四孝

作者
近松半二
三好松洛
竹田因幡
竹田小出
竹田平七
竹本三郎兵衛

◎第一

春ハ曙漸白く成行まゝ、雪間の若菜青やかゝ摘出つゝ、霞たちたる花の比ハ更なり、されバあやしの賤迄も己〻が品ゝ付き壽祝ふ年の兄、ましてやいともやんごとなき、大樹の元の梅が香や、先咲初る室町の、御所こそ花の盛なれ、君ハ足利十二代源義晴公、左大臣ゝ任官有武威海内ゝ輝て、のべぶす六十六つの花豐なる世の貢物、殊更妾の腹ゝ男子懐胎有けれバ、猶も目出度奉ぞとて、北の方たをやめ前、相州の大守北條相

撰守氏時、越後の城主長尾三郎景勝、其外參勤の大小名、大流小流松竹島臺蕗の臺、かゝる時代ゝ大廣間各賀義をヤさるゝ、氏時は前ゝ謹で、は先祖足利魯氏公、二つ引兩の旗を以て天下の棟梁と成り給ひ、五畿内ゝヤゝ及ぶず八隅の外迄威勢ゝ靡、頻を上る者なき所ゝ、頃日諸國ゝわれ〳〵の合戰起、就中甲斐の住人武田晴信、越後の謙信と鋒先を爭ひ、君命ゝ從ゝざる條上を恐ぬ行跡、急度糺明も、有べきを、其儘ゝ差置給ふゝ且ゝ武威の薄きゝ似たり、いかゞ計ひゝんと我ゝ顏ゝ言上す、義晴打默頭せ給ひ、我も此事歎かゝしく、兩家和睦を調へんと、先達て兩國へ此旨ヤ遣ゝし置、去ながら謙信が嫡子三郎景勝、とくゝ我ゝ昵近し忠勤厚き武士、只心得がたきゝ親謙信、跡を登し今日迄、上洛致さぬ心底いぶかし、親の心子しらずといへ共、父の心中よもゑらざる事あらじ景勝、いかゝと有けれど、三郎大きゝ恐入、親謙信義老體の上、多病ゝよつて引籠り罷

有ば、名代の景勝君は召のは諚の趣、早速ゆ達しつれば、上洛の日限も一
兩日の間ゝ過ず、又晴信と不和なるゝ、彼家よ傳へし諏訪法性の兜、隣國
のよしみよ借受しを武田の武勇を羨むなんど下樣の惡口、一徹短慮の
親共彼是詞戰ひより思はぬ確執と成し事、いか計我等が歎、先晴信を召
寄らせ君のは詞を添られんよ、誰がいなとゆべきと詞の半、北條の家臣
村上左衛門罷出、武田晴信參上と、取次聲よお次の襖引立ゑぼしのおの
づから、智勇備ゝる甲斐の國、武田大膳大夫晴信は前間近く出仕有、たを
やめは前の給ふ樣、武勇烈しき長尾武田、君の柱と思し召、兩家和睦をは
からせ給ふ、有がたきは上意ぞやと、傳へ給へば義晴公、汝謙信と不和の
基、法性の兜とやらん、武田の家の重寶とゝ何れの代か傳ゝりし、語れ聞
んと仰ける晴信取あへず、さん候元此兜ゝ我等が氏神、諏訪明神か夢の
中よ給ゝつて、明神の使ゝしめ八百八狐是を守護す、神通力加ゝつて是

を着する度毎ゝ、合戰勝利を得ざる事なし、越後の謙信隣國のよしみ拜せん望默止難く、彼方へ持せ遣ハせしが、俗ゝ云心安きハ、却て不和の基とやらん、畢竟何の詮なき爭ひ、晴信ゝおいて聊も、ハ諚ゝもるゝ事あらじと、おとなしやかゝ述らるれバ、北條氏時進出、コレ晴信、兩國合戰ゝ及ぶ一大事、子供童のいさかひ同然ゝも左樣の事でハ有まい、兼て親有甲斐越後、故もなき合戰ハ東八ヶ國を騷動させ、其虛ゝ乘て大將のハ所を騷す、兩人が云合せの軍とハ疑ひかゝうた上、懸き和睦の受合、猶以て呑込ぬ、必定野心なき云譯、聞ん〳〵と語かくる、主の尾ゝ付村上左衛門、氏時公のハ眼力適黑星、ぬらりくらりとのぬめた晴信謙信の狸入道、長尾の小狐、化顯ハせと、何がな支る心の底、一物有と見て取景勝、コレ村上、ハ邊ハ信濃、國の住人、晴信謙信合戰の節も隣國の加勢ゝ事寄、兩國を云てやらんと召れしかど、底意知ずとはかりし故、先ハ邊から攻討しゝ、牛房程な尾

をふつてほう〳〵よ逃られしが都へ登氏時殿よ媚諂ひ掛人の倍臣奉公、其無念を晴さんと我〳〵が中をさきたがる、夫いとも有君のに諛に遷達が出過の助言、ずつこんでお居やれと、一口よやり込られ、頬を赤めて閉口す、北の方聲うるいしく、仮初の詞よる、猛い武士の習ひよて此爭ひを鎮るい、弓矢の力よ叶いぬ事、胡國とやらんの夷だよ王照君の色よめで、陣を引たる例も有、景勝の妹よ八重垣姫、迎聞ゆる美人、武田よい勝頼とて年比同し子の有由、軍を直よ縁の端、我君のに媒、幸けふの此嶋臺、齡も相生松竹よ花菱い武田の印竹よ雀い景勝のゑぼしの長尾末かけて、中睦じう致されよといと畏るに計ひ、冥加なきに仲立、君が仰のかひ有て、互よ力越後の國、中を結びし大將の詞い木曾の梯や、踏かためたる足利の家の、榮へぞ、久しけれ、名よ高き軒端の梅の、色そへて老若男女わかちなく、願ふ誓も誓願寺、茶屋の床几よ硯箱、發句俳偕三十一文字、歌よ和ちぐ都の地今を盛の梅が香や、左大臣義晴公の妾腹の方を設の幕打

廻したる花の下、此下かげの舍より、は身よ懷五月の、帶の悅び身の願ひ、姥嬶よ至る迄、きらを飾し鈬乘物、は供よゝ直江山城之助、跡よ引添歩若黨中間小者に至る迄、茶辨とふからたべて盈、皆取揃へ歩みくる、山城ゝ心得て、ヤ〳〵賤の方樣もふ是が誓願寺、暫是よては休と、ヤ上れべ賤の方、は乘物を出給ふ、花もおさるゝは姿、山城、今年ゝ取分誓願寺の、花も一人盛と聞、義晴樣よ願ひを立て來りし故、そなた衆もいかゐ苦勞と、仰よ山城頭を下、有難きは詞、コレ姥衆向ふよ見ゆる山〻を、賤の方樣よ一〻敎ヤされよと、指圖よみはしが云やゝり出、ヤ賤の方樣は覽遊べせ、アレ〳〵向ふの高山ゝ比叡山とヤて都の富士、扨其次ゝ銀閣寺棟も名高き高臺寺、名高き事を釣鐘よ、鳴響かせし千疊鋪、大佛樣と脊競の、三十三間堂、又こちらなゝ鞍馬山僧正が谷の谺よひゞくみぞろが池の水の音、加茂川流も清き、上加茂下加茂金閣寺衣笠山の五體佛西行櫻、三條小橋出合た所が壬生の寺、四條川原の芝居側、朝ゝとうから〳〵と、待兼山の時

鳥、夫れ町中の宏やれ詞聞よ北野の天神様、三十一文字の歌よりも、當世はやるあこぎが土、どふした事やら此比れ、みの便もない戀中の、數も、よまれぬ、螢火や、祇園の社、揚弓の、音れかつちりとん〳〵と、當り、初たるつうてんと、口合たら〳〵だら〳〵と、長と〳〵を云ければ皆〻興よぞ入給ふ大黒舞を見さいな福大黒を見さいな、あら玉の年の始の福大黒と聲玄はらしき、幕の本、ざゞめく女中、取〻の中よ交る山城が機嫌上戸も姥の膝よもたれて、洞〳〵春の始の福大黒、打よつこりのぽつとり風、男たらしのすつぱより、かわいらしいれ此みはし、献〻九献の折も幸大黒舞、所望〳〵とせり立られ、早悋氣する女氣の、大黒舞を見さいな惡性大黒見さいな、一よ色有顔付で、二よよつこりお笑ひ顔見れば見る程腹立の、四つ餘所の色取よ、五つ因果な見初てむしやうよかれゆひ其中れ、連理の契りとわしや思ふ福大黒見さいな、洞ヨヽおめでとうございますと、頭巾を取ば賤の方の召使、名も八つ橋の、器量よしは傍よ手をつかへ、今日の

ほ供よはづれしより、思ひ付の大黒舞おはづかしやと袖おほふ、賤の方興よ入、夫も自を慰めの爲、嬉しいぞやとほ仰、山城ゝもぢ〳〵と思ひがけなき八つ橋よ見付られたる此場の時宜、赦せ〳〵も目顔でゑらせ我等ゝ寺へほ出の樣子、ア入んと立上り、住持の方へ急行、跡へのさ〳〵歩來る村上左衛門義清直でゝ行ぬ、頽魂賤の方と見るよりもほ傍よつつと寄、今日是へお出の樣子承り、ほ跡慕某がア上度一通、八つ橋もよつく聞、主君北條氏時賤の方のお姿よ迷ひ、明暮ちゃの物思ひ、餘り見るめもいたゝしくア上るも憚ながら、あなたのお心一つよて、氏時樣の悦びゝ、外へゝ行ぬほ身の爲、だまれ村上、脇妻妾と云ながら、義晴樣の胤を懷せし自なれば、いゝゞ主從ゝ其ほ了簡小い〳〵、主よもせよ家來よもせよ、國家の政道納め給ふ氏時公、日かげ者と云れふより、北の方よ成のゝおいやか、コリヤ八つ橋そちら向て計居ず共、われも俱〻お勸ア せ、又われよゝおれが首だけ、思ひゝ同じ戀の媒、何といやかゝいやでゝ有まいがと、

もつれかゝれる咽の下、髭顔びつゝやり立退八つ橋〳〵逃ても逃さぬと云なだれ廻る後の方、折よく歸る山城が、走寄て腕もぎ放し、コレ村上殿は酒機嫌かゝらぬ共、女を捕へ去とい〳〵不行儀千万、少は嗜なされよと、いふゝ八つ橋小氣味よく、お前の戻りが遲い故、夫い〳〵モウよい〳〵委細い聞た、何の村上殿が、無理おつゝやらふ、義清殿、定て夫い座興でがなと、知ても知らぬ直江が風情、義清も底氣味惡く、ナニ賤の方樣未は參詣なさらぬ、某は供仕らん、直江殿ゝい是ゝては休息と、何がな追從賤の方、過て改る義清が今の一言、只何事も見ぬ聞ぬ、八つ橋直江い此所ゝて、自が下向を待ちや、供い村上皆の者〳〵おゝやと立給ひ行も二人が戀中を、夫と推して本堂へ打連てこそ詣らる、跡い嬉しき八つ橋が、見かいす目元渡りゝ船首尾能逢瀬と抱付ぺ、ア、嗜みや〳〵、一つ館に居なから、適ゝ逢たか何ぞの樣ゝ若輩な人でい有わいの、イヱ〳〵何ぼ其樣ゝ云ゝ

やんしても、なつかしいい女の癖、奥へ通ひの長廊下、情らえうて屹度えた其殿ぶりを思ひ初逢も千歳の縁結び、かうじ〳〵て五つ月のやゝを懷た中えや物戀えうなうて何とせう、八ゑ計物思ハせ憎いお方と山城ゑこぼす涙ハ、戀の淵、サア〳〵道理えや〳〵、わし迚もそなたの事かハゆふなうて何とせう、どふぞそなたゑお暇玉ハり、誰憚ず女夫えやといハれるが互の樂しみ、無事で安産する樣と、神佛を祈てゐると、聞嬉しさハ百ばいの心ときめく八つ橋が、ちよつと〳〵ゑ山城も、下地ハ好也ハ意ハよし手を引合て乘物へ無理ゑ伴ふ折からゑ、早ハ下向と共廻り、出るも出られぬ八つ橋が、内と外とゑ氣遣ふ二人、乘物參れと村上が、指圖ゑ心得妙が、明て悔り戸をばつたり、わせる山城呑込左衛門、妙衆、ハ乘物を明たりさいたりゝ、聞へた、コリヤ其内ゑ何者ぞおるゑ極つた、イヲ改めんと立寄を、賤の方暫しと留め、最前ちらりと見し所、此乘物をめがけ逃込だハ

慥よひな鳥、よし何よるせよ其儘で連歸り、詮議い館でナヲ山城と此場の難義を助る情、直江が心の悦びい、割て云ねど乘物の内ゟ洩る有がた涙ふつてわいたる子寶の行末、長き下向道伴ひ、館へ歸らるゝ、咲分し、梅と櫻の花よりも、爰よ咲せし室町の、庭も玉敷奥ゟ殿義晴公の北の方たをやめゟ前、身い本妻の儘なれど君の寵愛淺からぬ、賤の方の懷妊をゟ身よかへてゟ介抱、いたいらるゝもいたいるも、何れ劣ぬ品容、何八つ橋、今朝から賤の方様のお顔持が悪い故、殿様よる殊なうお案じ、心がゝりいきのふの供先若や怪我でもなかつたかと、尋よとかふ諾さへ我身の戀よからまれていふも、いぶせき胸の内、思ひを察して賤の方今よ初ぬたをやめ様のお心づかひ、嬉しさ餘る願詣何の怪我がござりませう、夫いとも有、あなたい定まるゟ本妻賤い此身を上よ立、結構過たゟ挨拶やつぱりどふ仕やかう仕やと、おつしやつて下さりませ、是いあられもな

い自殿樣よ馴初てより今よふいて子を設ず、朝夕祈しかゝ有て、お前よ
お胤を懷されしい、取も直さず我子同然殊よ左孕いは男子の玄るし、足
利のは世繼と思ふ程猶あなたが太切悋氣嫉妬い姫ご世の習ひといふ
も、下〻の思ひ違ひし詞の裏、よしなき事を苦よやんで、もしもの事が有
てい大事のお身のさゝいり、最前から間も有ば、コリヤ八つ橋奥へ伴ひお慰
よ琴の組でもついまつでも始め、お心を引立よと、殘る方なきは惠伏拜
む手よふる涙何といわでの苦の露曇らぬ底の水鏡磨合てぞ、入よける、
己が權威よ案内せず明る襖もあらゝかよ、入來る北條氏時我慢の鼻も
立ゑぼし、は座の間よ畏り、見ますれば女中のみ晴信も景勝も未出仕
致さぬかな、ヲ、誰ぞと思へば氏時、玄らせなければいつの間よ見へたや
ら、イヤは存知なくても此氏時、勸る所い急度勸る、夫よ何ぞや在番でいな
どゝ、八前作る知行盜人某同前よ思召北の方のお心入いかよ結搆さば

く迚、白い黒いのわかちもなくて、ば前樣とゝいゝれますまい、誰憚らぬば身よて不斷お妾を上よ立、太切よなさるゝ程却てば身の敵となる、賤の方の心底黒い眼で見拔て置た、斯いふ中も心がゝり、早く館を遠ざけ給へと、口から出次第云廻せど、利きば身ゝ何もかも、呑込奥方妙共殿樣の召まするいざば入といふ汐よ帳臺深く入給ふ、義清の二字を守らぬ村上左衛門、はちくり返つて打通れば、氏時聲かけ待兼し村上、サア〳〵近ふ〳〵よ額際つき合計よ座を去めて、昨夜去めし合せし通心をかけし賤の方奪ひ取ゝ今宵の内、表門へゝ人目も有兼て用意のあの拔井戸、釣出す工夫も去て置た、此上望ゝ晴信景勝、不和なる中を幸よ二人へ焚付同士打させ、甲斐も越後も我領分、親子とゝ云ながら謙信が胸の中、某が思ふ所存も有ば邪魔よならぬゝかの一人心かゞりの晴信景勝仕廻ふて取が上分別、其片腕ゝ村上義清仰迄もなく存知の通某も元ゝ信濃

の領主成しが、晴信謙信ゑ切取れ其元の情ゑよつて主從の約をなせし上い再び信州へゐ歸しあらぺ此上もなき拙者が悦び、ホ、我望達せし上い、元へ納る信濃の領主、氣遣ひ有なと氏時が充なき國の切取咄し、後ゑ聞人の有ぞ共ゑらず思いず見合す顔、長尾三郎景勝、出仕致さぺ案内して、なぜ奥ゐ殿へ通らぬと、ていぺいひしぎゑちつ共動せず、こい北條殿の仰共存せず、出仕の時い先人並の所ゑ有て、其後奥へ通るが作法ム、然らぺそちい最前から、イヤたつた今何もかも、イヤ何が何と、イヤサゐ二人のゐ咄の終る所へ參りかゝり、ゐ挨拶も夫故延引、ゐ兩所ゐ苦勞千萬と寄ずさいらぬ景勝が、落付詞ゑ落付ぬやぶれかぶれと義清が、切付るをかいくぐり何科有てゐ手討ゑ謙信が子とい知ながら、つゐゑ是迄手練を出らず、武藝の試少しの差出ム、拙者が手の内試あらぺ、なぜ尋常の勝負もなく子供童の切合同前、比興至極の左衛門殿、ゐ望ならぺゐ相手と、

いわれてせき立村上が、廣言憎しと又切刀、鍔元むづと引掴是非知たく
ば腰骨よ、覺られよと。どうと投膝よ引敷とたんの稲子、切込氏時受たる
早速、北の方の聲として、天晴頼もし三郎景勝、武藝の試氏時も義清も、見
やつて嘸や本望と、夫といわねど玄ら化の、無念を鞘よ納る兩人挨拶も
なく立て行、のふ景勝、そなたの父謙信わいつぞやか、上洛せず、樣子あ
らんと思ひの外近〳〵上京との噂、我君よもお待兼と、仰よ三郎頭を下、
親謙信が不行跡、ほいかりの色目も一なく、玄たひ給わる有がたさ、親子が
面目是よ過じと詞の半へ小性共、出仕の樣子聞し召、早ふ呼との仰付で
ござりまする、ほんよ自とした事が、お待兼よ氣が付なんだ、晴信の出仕
よも程わ有まい、ア〳〵こちへと奥深き主も家來も芳しき、花の大紋たぶ
やかよは前を、さして入よける、言葉玄がらむ、から糸の心も直江山城よ
つながる縁の椽傳ひ、八つ橋か、直江樣、逢たかつたと取付て跡わ詞も双

方が抱えめたる障子の内、八つ橋殿〳〵と、呼いる聲よ恟りしかけ入こなた、山城が袂よすがれば、是いえたり、あれ程女中が呼でゐるよ、マア〳〵ゆきやとふり切袖、お前い賤の方樣、はつと赤面直江が手元、えつと引寄顏打ながめ、見ぬ唐土は、えらね共、此日の本を尋ても、又と有まい男ぶり、女のなづむ風俗を、見る度ごとよ色勝る、峰の楓葉心あらば、たつた一言可愛といふてたもいのと寄添給へばちやつと飛退いやは座興も事ぬよるは前樣い誰有ふ左大臣義晴公の北の方もは同前、殊よ主人景勝へ預置れしは身の上、見付られたら一大事、眞平は免と立を引とめ、こりやどの樣ふいふても、不義いお家の堅いは法度、ふゝ、夫程堅いは法度を背き、八つ橋といなせ抱れて寢やつた、エ、夫い、サアかういへば表向しらぬで濟せし昨日の供先、恩を思いぬそなたの胴欲わしが願ひのかないぬかいり、八つ橋と不義の樣子我君へ申上る、ハテめつそふな、夫おつしやつてい二人が

命、夫程こゝくゞわし任せよして、ヤア お宏やと無理よ引ぱる一間ゟ不義者見付た動くなと、聲あらゝかよ義晴公刀追取出給へゞ續てかけ出る北條氏時、直江が髻引掴椽板よよじり付、言語道斷よつくい不義者縛首討覺悟せよと、云も切せず、ヤのふ其人よ科ゝなし心をかけしゝ自計よきよ計ひ給ゝれと覺悟の体よゝ大將、身が手よかくる觀念せよと、ふり上給ふ、刃の下、ヤレ待給へとたをやめゝ前、賤の方を押圍ひ、ヤア我妻、一朝の怒よ其身を失ふとゝよくもゝ存知有ながら酒よ長じ色よ迷ひ、善なる事も惡と見てゝ成敗なされてゝ國中よ人種ゝでざりますまい、賤の方の不義放埒誠、と見せて實でない事、此たをやめが見ぬいて置た、ヤア打明て給われと、仰も涙の顏を上、ゝ推もじの上ゝ包よ及ゝず過し比ゟか目よ入義晴公のお妾と持はやさるゝ其内よ君のお胤を身よ懷せとゝ怒の色目もなく、濃ゝのゝいたゝり、胸よ釘針さすごとく、お志が節なさ

故、何よも云らぬ山城之助、無體な戀を云かけしも不義者の名を取て君のに手よかゝらん爲、こらへて下され直江殿恩と義理とよ此命捨るゝ更よ惜からねどよしない腹を假初よも、足利のに世繼と敬るゝ子を持ながら闇ゟ闇よ落すかと思へど返らぬ我覺悟、情ゝ却てお家の仇、一旦に不審かゝりし上ゝ只いつ迄も不義よ云て、自計を殺してたべ、頼上ます、〳〵と洗ひ上たる心の實、眞實見へて道理也やゝ有て義晴公、そふなうてゝ叶ふまじ去ながら、我胤を懷しながら今死でゝ彌たをやめよ義理立ず、髮ゝ剃ねど尼法師我愛着も是限り、身をゞ大事よ平產せよと、打てかへたるに仰落付賤の方〳〵も、今こそ晴る悅びゝ、產ぬ前から若殿の安產有しこゝちせり、かゝる折から取次の侍罷出、西國方の武士とゞに献上物持參致、次よ扣へ罷有通しゞさんやと窺へゞに献上と有ゞ苦しうない、早く通せと氏時が、下知の詞よ賤の方直江引連立給ふ、待間

程なく白洲の内、袴の肩もきつとせし眼中尖き術有人相何か白木の臺の物恭々敷も指置て恐入てぞ平伏す、ついよ見馴ぬ其方ハ我君よりの献上迚怪しき一品、先汝が生國ハ何國仮名いかよと尋る氏時、ハア某ハ井上新左衛門と申て、則生國ハ薩州種が嶋の住人なりしが、故有て涙人致し、何卒昔よ立返らんと、心計ハはやれ共頼べき主君もなく、無念の年月を送る所よ、ふしぎよも此賜我手よ入しハ、天道未捨ざる所、誰彼と申さんより、恐多くも義晴公を主君と仰奉らバ武士の面目是よ過しと罷登し新左衛門君命じて召時ハ、駕を待ずして行と申せバ憚も省ず召よ應じてハ前へ推參、執成願ひ奉ると、頭を下て演よける、大將一〻聞し召性根を見込召使筋もあらん、其方が持參の物、いか成益よ用るや語れ聞んと仰有、ハア是こそ異國よおいて鉄炮と異名を呼、玉を仕込て放す音、雷霆のごとく當る事速よて、戰ひよ用る第一の兵器成しと聞たる計、未此

地よて見ざりし所、則先月六日の夜、烈しき難風吹起し、大船小船いふよ及ず、中よも、唐船と、相見へ種が嶋の浦よて破損せしが濱邊よ殘りし此鎭炮、持參致せし奉公初め、今ゟ是を手本として、戰場よて用給へゞ敵へ殘らず鏖、左程の德有といへど用る事をしらざれば、取得ざるも同じ事さいふ汝が其鎭炮遣ひ樣存知てゐらば、我目通で傳授せよ、早く〳〵と義晴の、仰よはつと新左衞門辭する、色なく手よ取上、君よ向ふへ憚有、不禮へは免と立直り熊後を見せたる手の內、同〳〵は覽せ、斯も搆し火蓋の所、さす敵と見るならば、まつかう有と引がねよどうと響し大藥ねらひ外さぬ義晴公うんと許よ息絕たり、是へと驚く諸大名、遁すなと下知よ連、取まく家來を事共せずなぐり立たる鉄炮の手並よ恐寄付ねば夫の敵と北の方、てうと打たる長刀の刃むねをけづて蹴上れば、透さず付入石突よて落たる鉄炮見やりもせず、工も深き拔井戸へ飛込跡へ亂

は、心亂さぬたをやめは前、君の亡骸奥の間へ敵の詮議い此鎮砲、逃隱る共遠くい行じ四門を固て取逃さぬ、手筈を定めゑらせの鐘、氏時早ふとかい〳〵敷、仰受つゞ次の間へ走入ゑ相圖の鐘響ゑ連たるは殿の内、螺貝太鼓ゑ手を合し、挑燈松明一時ゑ、四方八方圍しい遁がたなき有樣也、かゝる騷の奥庭ゑ目計出した大男、賤の方を引立出、かけ行後ゑ三郎景勝、曲者待と呼いる聲、心得眉間ゑ打込手裏劍遁るゝ曲者强氣の三郎、無詔なれ共小柄の手裏劍、是を證據ゑ一詮議と遁足出して、追て行、襖をさつと武田晴信、君の大事と心も空勢ひ込でかけ來れば、引續て薙髮の相長尾入道謙信、只今上洛仕ると、不和成事い物をも云ず、かけ入んとする一間ゑ、氏時向ふゑ立ふさがり在番の武田晴信、君は落命の場所へい參りもせず、納過た出仕顔、めつたゑ奥へい通さぬ〳〵、謙信迚も左のごとく子故ゑかゝる身の疑ひ、行衛知ざる三郎が脫捨置し素袍ゑぼし、は殿

よ置い武士の穢燒捨て仕廻やれと、わくる詞も一物二物、三方論議の抔からよ、北の方たをやめは前銃砲携出給へ、皆〻敬ひ奉る、珍らしや謙信、思ひ寄ざる我君のはさいごより、すべて疑ひかゝるといへど取分て武田長尾い兩執權天下の政道も執行ふ身を以て、久〻上洛せざりし越度、又大膳太夫時信いけふよ限つて出仕の怠り、日比の不和も我君を人知ず害せんと、疑ひかゝる兩人を其儘よ指置てい、女ながらも身の誤り心よ覺ないよもせよ、此場の大事よはづれし不運、自い元より諸大名の疑ひ晴す思案が第一、源家の忠臣土佐坊昌俊僞りよ誓紙を書誠を見せたる七枚起請、夫い誰しもまゝ有るならひ、是い夫よ事かいり、本心曇ぬ胸の鏡、磨立たるゑるしがなうてい身の上の曇晴ず、家を立ふと立まいと面〻の返答次第、サア〳〵何とゝ北の方、あなたこなたを思ひやり、わつと泣たい所をも泣ぬい遠大將の、奥床しくぞ見へよける、理の當然よさし

もの二人、下る額の玄いよりも眉よ寄涙胸よ滿、誓し詞もなかりしが、何思ひけん武田晴信ずんと立てかたへなる、紅梅一枝はつしと切ぺ、謙信も劣じとゑぼしの眞中さつと切、ぱ返答ヤも恐れながら、昔が今よ至る迄、惡事よ組し家國を望み、叛逆無道の名を取も、子孫よ殘さん爲計り、夫よ引かへ某が胸中花物いいねどまつ其ごとく一子勝頼が首討てぱ覽よ入るが身の云譯、謙信迚も斯の通、賜景勝が行衛を尋善惡たり共首討て、ぱ渡しヤ證據のゑぼし、勝頼よも、景勝よも心を殘さぬ我〻が北の方へのヤ譯、此上よもぱ批判あらぺ、仰聞られ下されと双方詞かいさねど割符を合せし忠義と忠義、たをやめぱ前涙ながら、心底見へた此二品かけがへもなき兩家の纏木、花を惜まぬ心の誓言是、よ上こす事有ふか、其所存を見る上い、最早勝頼景勝を殺す迄よも及ぶまじ猶此後い自が力と頼晴信謙信、此鉄鉋こそ詮議の種、遁敵を討課せ君のぱ無念晴し

てたも、〻〻、發明なれ共、道い女義、當座遁れを誠と思ひ、殺すなといふかく〳〵、餘人い格別此氏時、いかゝしても呑込ぬ、花とゑぼしゝ譬し躰せひ首討て出すべしと、何がな支る邪智佞奸、たをやめ暫しと留給ひ、諸大名の鑑と成べき古老の臣、一旦番し詞い金鉄、などか僞り有べきぞ僞り飾る所存ならば、其儘ゝて歸さふや、去ながら假令潔白立る迚も、我君の三回忌追善供養終る迄い、虫けらの命さへ、夫の爲ゝい助もする、況や科なき二人の命、殺す基も敵の行衛、何卒三年が其内ゝ尋出さば助る二人夫も叶ゝぬ物ならば、討て出すも世の掟、我身の掟い此通と、二世と兼たる黑髪を、根よりふつつと押切給へば、晴信ゑぼしかなぐり捨、君の一字を蒙る某、姿計い主君の供と指添拔て髻拂ひ形をかゆれば名も改め、今ゝ武田入道信玄と法名し、心いかゝらぬ以前の晴信、忠義ゝ忠義を重し、と思ひ込たる一生の浮沉、膽ゝてたへし敵の有家、雲の裏ゝ隱るゝ共、天

地の間い獄屋の内、に心慮易思召と我子の命黒髪も、切て捨たる勇僧の其名も、武田信玄と云傳へしも斷也、氏時はとんとゑつぼゑ入、左程の性根を見せずんば謙信晴信といいれまい、敵の有家ゑるゝ迄我い都ゑ押止まり、君の亡骸取納め政導紛す身が役目よ、もや違背い有まいと、己が悪事を白洲の内、身の誤りゑ山城之助、ゑは〳〵として手をつかへ、賤の方を奪いれし我等が越度故、主人景勝へ疑ひ掛りしゆ譯と、刀の柄ゑ手をかくる、のふ待てたべ直江様と、八つ橋も轉び出、不義い二人が誤りなれば、お前計殺しいせぬ、わしも俱ゑと死覺悟、謙信聲かけゞつと睨付、八つ橋と不義の様子、躬が方ゑ聞やいな勘當とゆ置たれば、主從でもないうぬらがむだ腹、五十百切た迚かゝる大事の爲ゑならんや、うろたへおらば逆磔、兩人共ゑ出てうせいと、口と心い裏表情の勘當、有がた涙、早退出と長尾入道君を害せし面体い ゑらぬ共、悪逆千里ゑ響せし此鉄

炮こそ囚人同前、某急度預置詮議の工夫ゝ胸よ有、先夫迄ゝおさらばと鉄炮提立上れば、信玄も諸袖よ禮義ゝ演ても顔と顔、不和なる良將勇將の中を隔る北條氏時、底意を見拔北の方、浮む涙も、手向の水別れ〳〵て歸りける、夫婦も返らぬ殿の名殘、せひもなく〳〵立出る村上左衛門義清横田兵内諸共よ手の者引具し立ふさがり、どこへ〳〵義清が心をかけたる其女、此方へ渡さばよし異義よ及ぶと目よ物見せん、何んと〳〵と呼ゝつたり、こゝくもない義清風、いか樣よ吹しても身動させぬ大事の女房、主君もなければ遠慮もない、指でもさゝば撫切と、八つ橋かこふてつゝ立たり、物ないゝせそ、討取と拔連〳〵切てかゝるを事共せず、夫婦諸共拔合せ、切立られて村上左衛門命が大事と逃行跡、打合切あふ刀の光り、電光石火の間もなく薙立〳〵、薙立れば殘る大勢立足なく頭われられて血ゝ瀧つせ、逃廻るのを横なぐり、兵内透さず後から、直江

やらぬと切刀ひらりとはづせば思ひすも、家來をけさよ切付たり、是ハと驚く兵内が、首と胴との生別れ、心地よかりし事共也、邪魔ハ拂ひし嬉しやと悦び歎の數〻も、思ひハ七重、八つ橋が渡りを得たる女夫連、此上ハ賤の方、再び廻り近江路や歟もいつかハ美濃尾張、果ハ駿河の富士よりも、名高き君の御最期を悔どさらよ甲斐越後、不和成中も陸奥の直成直江山城夫婦忠義ハ代〻よ、岩清水清き流の木曾川や夜半よ紛れて出て行

○第貳

惠ハ四方よ隱なき、下諏訪の神垣ハ下照姫のに神よて、靈驗あらたよまします故、近國の貴賤歩を運ぶ賑ひよ、禰宜が小鼓神樂歌神慮も、嘸と云られける、殊よけふハ卯月の初に神事の宵宮迚、商人百姓草苅の小童迄お千度お百度絶間なき、其中よ、車つかひの養作、馬塲先よ車引捨立寄て、

ホ、皆近在の知た者共、太郎よ、丑松よ、よふ參つたなあ、簑作遲かつたされぺかれも上諏訪迄、油かす付て行て草臥果た、ちつと休で跡からいのと、神前の大石よ腰をかくれぺ　簑作、其石ハ明神樣の力石迚其石よ腰をかくれぺ、其ゑらい石を上ねぺならぬナアそふじやげなけれど神ハ見通し見て見ぬふり、そんなら休で下向仕や、後よ逢ふと別れ行、是等も同じ車遣ひの惡者共、宵宮參りよ肩臂を、いかつ聲でコリヤ簑作、わりや此神前の、力石の事知て居るか、ほんよそふじやたつた今も子供等がいふたけれどあんまりしんどうさよ忘てひよつと、イヤ忘たといいれまい、昔から當社のならハし、腰をかくれぺ叶はぬ簑作、ナアヤ勘八九助、ヨ、權六がいふ通其石上い、上よや宮へ斷て、明神樣のお神酒代を上るか、ナアヤ　どふじやと石の手詰よ簑作が、知て居ながらおれが鹿相、二人三人かしつた迚地放しもならぬ力石、どふぞ皆が沙汰なしよ下内て、イヤ濟されぬ、上ねば宮

へ引ずつて行、ヲ、そふゑや〳〵、日比から女たらしで、生ゑらげたゑやつ頬踏よじつてこませい、サア立動けと兩手を引ぱりせちがふ折から、武田家の奥家老板垣兵部、供人引連參詣よ、此体見るより家來共よ引分させ、始終の樣子聞たるが社法を背し不届とな併慈悲第一のゆ神なれば、法よ行ふよも及ぶまじ爰い身共が籠作どやらんよ成かいつての詫若い者共、侍が詞を下る了簡してとらせやいサア お侍の詫なれば了簡ゑたい物なれど宮の掟が、サアそこが有よつての詫、身い信ゑの家來畢竟あいらい籠作が訴人なれば、我領分へ連歸つて訴人の科よ急度行ふ、サア何と了簡するかいなといへば云分有と、氣色かいれば三人がヤ〳〵、夫程よおつゑやる事ならお宮守へいさたなしと、いふよ悦ぶ籠作どなた樣か存せぬに、お詫なされて下されて有がたう存じますと、手を合すれば、ヲ、禮よい及ばぬ其代よい、其方へ少願たい事が有、旅宿迄來てくれま

ぴか、是ゝ〳〵所縁かゝりもない私、お詫なされ下されて忝い譬さふなく共お侍のお頼、身よ叶ふた事ならぱ用の子細爰よて仰下さりませ、夫ゝ過分去ながら、爰ゝ社内參詣も多けれぱ、身が旅宿へ同道して、密〻よ咄したい殊よよらぱ隙取ふ、そふ心得て太儀ながら歩でくれふか、何が扨何國迄も、來てくれふや、重疊〳〵、家來共簑作を同道せいと、賽て板垣兵部旅宿をさして、立歸る、雨ヤ、簑作めをゆすつて、酒買さふと思ふたよいゝれぬおさむが挨拶で骨折損もふ此上ゝやけの勘八權六九介も、鳥井前で目で一ぱいやりかけふてい〳〵と鼻歌で鳥居の前へと急行、夕暮時ゝ、參詣の人もとだへて神前の、ぱ燈の光ゑん〳〵と、神さび渡る其氣色年も漸十七か八ちく草履も足がるよ見ゆる所体もぽつとり風、武田の姫濡衣が何か願ひゝ鳥居かざす、榊よ數取て、お百度參り、大麻も引手に、神やなびくらん跡から憎い風俗の大道はたかる鳥居先、信

心白砂蹈付た懐手して神參、姉さんよふ參らんすの、おれも明神せぶりよ來た、お百度の連よ成やんえよ、是ゝ〻〻どなたかえらぬが、幸な道連もふ日も暮かゝつて、女一人ゝ心細い、そふであろ〳〵、えたい〻〻日暮から、太膽なげんさい樣えや、〻〻一度、鳥居から百度ゝ太儀、姉樣えんどか手を引かへ、〻〻えんどい迚大事の願、身をこらさいでよい物か、ム、身を懲すとゝ戀であろ、イヱ〳〵そんな事えやない、夫なれゞよい着物がほしいといふ願でゝないかや、何をわつけもない事計りそふおえやんすお前の願ゝへ、おれが願ゝ商賣の四つぼ、此間くさり續さし計よ成たから思ひ付の百度參り、いか樣姉樣の足のかるさゝよく〳〵の願ひと見へた、連立るゝ物えやない、其樣よ歩かえやるので〻〻、好もしい股の邊が、すれませふ、〻〻そろ〳〵歩いておれがいふことを聞つえやれ、色事でなくゞ、おれといどふえや、〻〻うまい腰付えやと、とんと擲ゞ、笑止大事の〳〵お百

度よ、惡魔をさして貰ふまい耳よ諸の不淨を聞て心よ諸の不淨を聞ず、はらひ給へ清めて給へとから手水興蹴い神道つかひ、かたい所が塊床しい、コレ神樣ハ粹ぢやついちよて〳〵と叶へ給へなぴき給へ、てんで、ういハずと信を取て祈る功德の神よりハ、跡からくどく神樣もほつと草臥待たり、ヲヤ、ぢんどや〳〵佛の顏さへ三度といふよ、神樣のお百度ハ、足も腰も拔果た、ちつと休もと大石よ腰をかくれバ濡衣ハ、一心不亂是で丁どお百度の數も大方辦を麻、大願成就なし給へと、伏拜引鈴の綱切て落れバ濡衣が、胸よ當りし、案じ顏、横藏傍へ立寄て、コレ何とさぢやつた姉樣、サイナわしがお百度ハ大事の〳〵お主樣の命乞鈴の綱の切たのハ、お命のないと云、明神樣のぢらせかと、涙ぐめバ、エ、氣のよハい、さすがハ女子と、鈴の綱手よ取上、てなたの命乞するお主ハ男か女か、ソイ殿達でございす、夫なら吉左右、此鈴の綱よ書て有ハ、十七才の男子、息才延命と有

からん神も納受、夫ん〳〵お嬉しや、お主のお年も丁度十七、よし〳〵、此鈴の綱持ていんで戴さえやれ、ア、成程よいお方よお目よかしつてお命乞の願成就、重ては縁も有ならば此お禮、神よ願ひの甲斐の國と、詞殘して鈴の綱押戴て、濡衣ん、嬉しさ足も地よ付ず、悦びいさみ立歸る、横濱ん跡見送り、餘所んない命でさへ、神の納受で生るのよ、生る事ん扨置、胴取りやくさる、はれがしれる、もふ今夜の望姓がない、是からん明神樣をおれが仲間の胴頭よして、此箱の賽錢を胴錢、試よ神樣を相手よして、三つぼの廻りえて見よふと、くんらりと打明、ア、むぐて是程有ば、今夜の望姓んらく〳〵、神樣からふらえやませと、張るなげるも我一人、三つぼのさいをめつたぼり、おつと神のえくはつく、一廉ん立棒で受ます る、是からおれが親の番、〳〵神樣はらえやませ、ハ、ア、ひり十よねだ切お出か、爰を一番當たいがなむさい明神なり給へ、當り給へと、ぼいとなぐ

れぺでつくの一、サア云てやつたとさらへるさいせん、神様も一文無、是からい拜殿燈籠神樂太鼓なんなりと形を見ねぺ錢かさぬ、譬貸ても、正直をおもよする神樣なれぺ、よもやぶさい打云やるまい、負たと思ふて神腹を立さ云やんな、全我等くらざいいつかやせぬ、イヤはや、どういふた迚あへんど一つ打云やれぬ、結構な神樣と、錢の有たけ財布へねぢ込、コレ盜みやせぬ、相對づくで勝た錢、勝づいでよ何なりと、せしめてくれんと邊うそ〳〵、よくの眼よ見付る太刀、是幸の一望姓と、拜殿よかけ上りくゝりの金物捻切〳〵、己がせしめる奉納の、太刀脇ばさみかけ出す向ふへ、長尾の家來落合藤馬、供人引連追取廻し、最前お窺ふ所、此主人の奉納の太刀、盜取よい子細ぞあらん、白狀させんと飛かゝるを、引ぱづして拔手も見せず、首いころりと落合藤馬、狼藉と取まく家來博奕打よい似合ぬ横藏なぎ立〳〵追て行、折から出合長尾三郎、人音太刀音心得ず、窺

ふ足元落たる首、は燈の光りよよく見れば、家來落合藤馬が首、ハット驚邊を見廻し、思案廻らす横皺に、血刀提立歸り、心がしりに以前の首、後日の邪魔とくらがりを、さがせば景勝聲をかけ汝が尋る心の一品、今神前で某が、捨ひ取てコレ爰よと、差出す首を見て悔り、返答一句も先へに出ず、跡よ家來が、ばら〳〵〳〵、奉納のは太刀を盗落合殿迄殺せし曲者、最早遁れぬ百年め腕を廻せと追取まく、待〻者共、眼前の家來の敵身が手よかけんと社燈の光り、顔つく〳〵と打守り、落合藤馬が首討たる手の中、多勢を相手よ薄手もおいぬ力量を持ながら、盗賊と聲をかけられ刀を投出し、誤入りたる頬付に、まんざら理非の辨へないやつでもない、こりや儕出來心ぞやな、武士の家來を手よかけしよつくい盗賊、只今成敗するやつなれ共命に助た、え、すりやは赦免下さるゝか、長尾三郎景勝、身が手をおろして討べき首に、天が下よ一つか二つ、儕でときよ目にかけぬ、此

社よ一七日參籠の大願未滿ざる内なれば一命を指赦す、餘人よ个樣の狼藉せば忽絶命、頽魂よ見所有やつ、性根を改め、其首の胴よ付て有やうよ慎おれと和らかよ、生れ付たる大名風、供人引連悠〻と心殘して立歸る、ア、ひやいな事、命一つ拾ふた、是から博奕場へ行た共此ふまんでい埒が明まい、一ぷく呑でいんでこまそと、力石よ、腰打かけ、ずり火燧取出し信濃たばこをすつぱすい、すつぱの車遣ひ者どや〳〵と社内よ入、横藏を取廻し、わりや此力石の法ゑつてゐるか、ヲ、知てゐる、此石を上る覺が有て腰かけたが何とすりや、〳〵已よ千手觀音の手が有つてもならぬ〳〵、石い扨置、おいらが相手よ成て見よと兩方ゟ、小腕取ぐつと捻上、やまい事すなやいと、右と左へ踏のけ蹴のけ、後へ取付勘八が、首筋掴で引廻し、宙よ提ふたりが中へ人礫、こりやたまらぬと三人が、頽も體も砂まぶれ、ほう〳〵逃て立歸る、ヱ、よはいやつら力石〳〵と仰山よぬかせ

共、拍毬程な此小石、まつとおつたら上るのを見せふよと、兩手よひんだきかる〳〵と、ぐつと上たる石の下、穴を穿てぬつと出る、白髪交りの有髪の老人身よゝ曽簑異相の體、さしもの横藏ぎよつとして、下界の人か仙人かと顔を、ながむる計也、若者力量見届た、此一巻よ血判せい、ム、此地の底を住家よして、人をためす心の底、問ねど聞ねど、大望有人と見た、品よよつたら頼まれませう、が此横藏も、其元樣の器量を見立て、頼たい事がござりまする、小ざかしくもヤたり、主從ゝ一體、主ゝ家來を頼、家來ゝ主を頼ならひ、汝が頼の子細ゝいかよ、則是よと懷中ゟ、一巻を取出し、老人是よ血判が云て貰たい、ハテ思ひ合た頼ぞやな、汝も、ほ邊も、かゝらぬ大望、身ゝ其方、を家來よする氣、身共ゝほ邊を家來よする氣、どちらへどふ共決せぬ中ゝ、胸中を巻込た此一巻、めつたよゝ打明られぬ、此方迚も此胸の中、ひらかぬ中よ返事が聞たい身が返答ゟ其方が、住所ゝ何國、ッレ聞

たい、只野山を住家とすれば、住所とても定らず、とゝまる所も天が下、さ面白い、よし有家も聞ず共、一旦我目よかゝつた上も、雲の裏でも尋さがし、味方よ付るも折が有ふ、天が下を志す汝が望も、某と同腹同性、我も定めぬ、旅の空、志す方も六十餘州雨やどりする天が下、人自を蓑や雨具をくれんと、着たる背蓑ぬぎ取て、七重八重、花も咲共山吹の、みの一つだよなきぞ悲しき、重て逢ふと投やれば、天晴餞別受ました、手前も寸志の置土産、返辨ヤと力石、ぐつと引上投付れば、心得たりと受留て、慥よ落手仕る、ホヽウ、ヒヒ邊の力量も試ヤて、先安堵、再會〳〵、再會するも此蓑を印よあふも、七重八重十府の背蓑打かたげさらば、〳〵と諸共よ口よいはねど胸と胸をらせ合たる曲者共別れて、こそも、立歸る、死も武士の常ぞとも常の詞と思ひ子よ、今ぞかゝれる甲斐國、武田入道信玄と、身も釋門よ入ながら、武門花咲、庭の面、落葉、角助掃兵術が、ひきする箒打水よ、いとゝ

館ゝしめやか也、何と角助、何かゝしらず昨日から、一家中がひそ〳〵と夜の目も寐ずよ走廻る、其譯を何だと思へば京の大將、義晴樣とやらを誰共えらず殺したげな、夫で國〻の大名衆が、イヤ〳〵おりや殺さぬ、えらぬとゆつて潔白を立られたげな、そこでおらが旦那も其潔白を立ると云て、夫で館がさわぐげな、其潔白といふ物ゝ、どんな物だそちやえらないか、何だ潔白をわりやえらないか、イヤこいつ文盲なやつでゝ有、潔白を立るといふゝおらが小半酒を立ると同じ事で潔白振廻と云てお大名ゝ節〻有事、おらもちよこ〳〵潔白喰たが、中〻輕くて味い物、えたか鰻汁と同事で當らるゝと命がない、わいらも命が惜いなら、たが潔白を立べい共、必喰ふなと物えり自慢、取ても付ぬ下〻の咄しも物のえらせかと戻りかゝりし濡衣が、聞て案じる胸撫おろし、コレ〳〵二人の衆、下としてお上の取沙汰、わしが聞てゝ大事なけれど、若侍衆の耳へ入たらこなた

衆の爲よならぬぞ、掃除が濟だら勝手へでざれと、聞て恟り、頭角助とちめんぼう、おらい何よも白洲を掃兵衛箒かたげて逃て行、よしなき事よ隙取し、嘸奥樣のお待兼、濡衣只今歸りしと、一問よ向ひ、おとなふ聲、濡衣か嘸苦勞と障子ひらいて、常盤井は前、思ひなき身の思ひ子を、思ひ詫たるは氣色、濡衣こなたよ手をつかへ、上〻樣よ苦いない物と、思ひの外勝頼樣のお身の上、ふつて涌たるは災難お案じい理り樣、達者なお身でも有事か、お目の惡い若殿樣、もしもの事が有ならばと、思へば身も世もあられぬ悲しみ、悲しい時の神いのりと諏訪明神へ參りしも、今度のは嫌義免れさせたび給へと、重き願ひも叶いぬ告か、切て落たる鈴の綱、思い事はつと取上て、よく〳〵見れば勝頼樣の、お年よ違いぬ命の釣緒、十七才の男息才延命と、書て有しも神のお告と、嬉しさ餘る鈴の綱、是見給へと取出し、見せるも見るも打よつこり、ヲ、夫い嬉しや悦ばしや、切て落

しもそなたの眞實、神も納受ましまして勝頼が身よさゝわりない諏訪明神のゝ神詫是よ付てゞ京都の武將義晴公、何者共ゑれず飛道具を以て害せしより諸國の大名心區〻我人心疑ひ合ふ、中よも夫信玄よ疑かゝる身の云譯、一子を切て出すべしと、契約有しい武士の意路、されゝ共ゝ前のお情よて、君三回忌の其中よ、敵の有所ゑるゝならゞ勝頼も助よと、深き惠の立月日、早三回忌も事濟ど、今よおいて敵もゑれず、けふよつゝまる我子の命、何とせんかたなき中よ、持べき者い忠義の家來、板垣兵部我を招、お氣遣し給ふな勝頼公よす分違いぬゝ身がいり、兵部が存じて罷有ゞけふ中よ連歸らんと、舘を出しがわらいが樂、夫故兵部の歸りを待共、昨日よも夕部よも、今よおいていなせのないが、心がゝりよ有つれど、神のお告よ何疑、兵部の歸りも頼てゞ有ふ、そちも案じな濡衣と、ゝ悦びの折からよお傍使が手をついで、ゝ上使として村上義清樣お越也

と、聞て奥方涙ながら、早上使のお入とや、心充の兵部も戻らず、いやこれ濡衣、そなたゝ次へいて休足しや、上使への返答ゝ、自が胸ゝ有、あいさやゝ立ちやいのと、仰ゝ否共濡衣が、せひなく一間へ行跡へ、のつさ〳〵と入來る、上使ゝ聞ゆる村上義清、疊ざゝりも荒くれ武士、いかつがましく座ゝ直ゝ、奥方遙ゝ手をつかへ、甲斐と信濃ゝ國ならび其信濃ゝどざつた村上殿、今ゝ遙ゝ都ゝは上使とゝは苦勞と、いふゝ村上打默き、成程以前ゝ隣國の好心安ふ致せしが夫ゝ内證、只今ゝ上使の役目、子細ゝは及ばず信玄とくと合點の趣、勝頼の首ゝ渡しなされ受取んと、事もなげなる上使の權柄、成程其義ゝ夫信玄わらゝゝ付置し故、兼て覺悟ゝ之ながらも、今ゝの際ゝ是が、ゝゝ悲しうなふて何とせふ、親子此世の一世の別れ、心用意も致させたい、首討ゝ何の用意、手間隙なしの無雜作ゝ、拙者がたゞ一打と、立上るを押留め、个樣ゝさば武士の、身ゝ有まじき卑怯者未練

者共思そふが、何を包まん勝頼ゝ諏訪明神の御子よて、神よは苦勞かけ奉ゞ設し子なれば私よ殺すも神へ恐有、勝頼が命元へ戻し奉ると、諏訪明神へ代參を立たれば、せめてそれが歸る迄、暫くお待下されかし、あまちやゝな、其代參いつ戻らふやら知ざるを、べん〳〵だらりと待事なもの、イヤさのみ夫程間取まじ、おそふてけふの暮迄ゝ、ヤア此永の日を待事叶ゝぬ、然らば赤の上刻迄、夫も叶ゝぬ夫ならせめて二時の、用捨い武士の情ぞや、ヤアざと鰹を直切樣よ何のかのと、どひつてい夫程延てほしくば暫しの用捨ゝ迄てくれんと、庭よ飛おり、垣根の槿引みゑつて床の間の、花生へ捻込押込、コレ此槿のゑぼむ迄ゝ宥免致す、花がゑぼむと夫が寂滅、いやと云さぬ割符の一本、先夫迄ゝ奥で休足、ヒ馳走よゝ信濃蕎麥お手打が我等好物花鰹より勝頼の首、早く賞翫致したい、イザ奥の間へ案内と、いふよいな共槿の日影待間の命ぞと、思へば胸も板垣が、早ふ戻つて

くれかしと夫を心の力草村上を誘ふて一間へこそゝ入よける、始終の樣子物かげよ聞て袂も濡衣が、今ゝ恨を權よ、いゝん方なき憂身やと聲をも立ず忍び泣、洩隔たる唐紙を明ても明ぬ目なし鳥、むざん成ける姿よも、武士の角立角前髪袴の裾も長廊下、さぐる刀の手前さへ、面目もなき其風情、ノウ勝頼樣かゝいとしやとすがり、付て泣居たる、一筋な女氣よ悲しいゝ道理〳〵、只因果なる我身の上、適〻弓馬の家よ生れ弓矢打物取事さへ、叶ゝぬ畸人と成下り此儘無念な死をせんより、侍らしう腹切が弓矢神への身の云譯、此比母の物語其時覺悟ゝ極めて居れど畸人よ成ても子の命助たう思召、母上のお心づかひ無下よなすが勿體なさよ、今迄命延ゝれ共、今村上が使者の樣子、聞てゝどふも生てゝ居られぬ、目かゝの見へぬ勝頼を、大事よ思ふて長〻の世話、いかぬ苦勞を去てたもつた嬉しい共過分共、禮ゝ末來で〳〵と跡ゝ得云ず見へぬ目よ、涙を隱

すいぢらしさ、濡衣わつと聲を上帰い勝頼様、此館へ奉公よ來初た日からお姿を、かいいらしいと思ふ丈が、縁と因果の初よて、お主様共に主人共辨へゑらぬ、拙い筆よ、心のたけを岩本の、神の結ぶのお情よ嬉しい枕かいした時未來迄もと、おつゑやつた、其お詞が、誓紙ぞと樂しんで居る物を、お前計死ふとゝむでいつれないどうよくと我身をとんと勝頼の、膝よ打臥泣沈む、其恨い尤なれど親の赦さぬ徒なれば、どふではかない花の縁、もふ槿るゑぼむ時分隙入てい恥の恥、泣ずとそなたい次へ行きやと、早切腹と見へければ、ア、ヤ〳〵まだ槿いゑぼみい致しませぬいいなァいき〳〵と今を盛のお身の上、切腹とい情ないどふぞ助る仕様いないかと、留ても留らずせり合中へ母いかけ出テ、よふ留てたもつたのふ、最前來りし使者の様子、聞て覺悟い理りなれ共、そなたを助ふ計よ心を碎てゐるいいのふ、母が心を無よするのか、ゝ、アこい勿体なきに詞須彌

大海よ競ても及びがたなき母の大恩、さら〳〵無下よゐ致さねど、權の限りの命、隙取てゐ使者の手前、イヤ苦しうない大事ない、そなたよ寸分違ゐぬ身がゐり、慥よ有と板垣が館を出しゐ、昨日の朝、スリヤもふ戻るよ間も有まい、ヤ奥樣、板垣殿が其身がゐり、連てさへ歸らるれば勝頼樣のお命よさゝゐりゐなけれ、共、若又夫が違ふてゐ、夫も分別去て置た濡衣、そちや勝頼と不義してゐるな、エイいや呵るでゐない此母が、今改て女夫よする、エ、ずりやあの賤しい私を、ヲヽ賤しうても貴ふても女ゐ夫を太切よ、思ふが直よ氏系圖、目かいの見へぬ勝頼を身よかへて大事よかける、如在ない氣を見込だ故、大事の子なれどそちよ預る、連て此家を立退と、思ひがけなき詞よ惝り、アヽ勝頼樣を、合點がいたか、花が去ぼむと悲しい別れ、早ふいけとういけと、いふ中若や權の、去ぼれやせんと延上り見やる花より見る母の姿去ぼるゝ計なり、勝頼ゐ氣色を正し、コヽけしからぬ母

人のは仰、死を恐て舘を出なゞ後の嘲り家の耻辱、武士の命い義ゑよつて輕しと申、只始なき身ぞと思召諦て、命のお暇給いらゞ猶此上の母のは慈悲、お願ひ申奉ると、命惜ぬ健氣さゑいとゞせきくる涙を止め、此母が是程ゑ心を碎くゑ承引せず腹切か、もふ此上い留いせぬ、われな先へ此母が自害と指添追取ゞ、あいてとゞめる濡衣ゑ又取すがるむざんの亡目申母人段ゑ誤り入ました、お詞ゑ聞ひ此舘を、聞分て落てくれるか、濡衣も其心か、アイ〳〵必聊爾遊ばされて下さりますな、聞分てさへたもれゞ母も嬉しい、かういふ中も心せく、サア〳〵早ふと、勸られ、是非なく〳〵も立出れゞ、勝頼を落さんといのぶとい工、村上が見付たからい一寸も動さぬ髮へ引出し一討と、かけ寄先ゑ立ふさがり、コレ〳〵權の玄ぼまぬ中ゑ討ふとい、ヤア玄ぼまぬか玄ぼんだか脉の上つた死人花、是でも生るか生て見るか、サヌ〳〵どふしやと權の花を目先へ突付〳〵、突付ら

れて常盤井も何と詮方なき身ぞと、思ひ切て突込刀ッ悲しやは切腹と、叫ぶ濡衣驚く母ヤレ早まつた生害と、二人左右ゑ取付て前後正體泣沈む、勝頼苦き息をつき、ヤ母人お詞ゑ負し段、眞平御用捨下さるべし、是迄の養育は寵深かりし身ゝ盲目の淺ましや、軍慮ゑ秀し家ゑ生れ、戰場のかけ引叶ゝず、遠矢ゝ元より打物ゝ、漸刀を杖ゑつき、我家の内を探廻る、甲斐源氏の嫡流たる、武田四郎勝頼と、云れる是が武士か、よくも武運ゑ盡果しと、思へゞ此身ゑうんし果、けうや切腹あすや自害と、毎日〳〵刀を手ゑ取上ゝ上ながら、思へゞ深き母の大恩、我先立なゞなき跡ゑて、嘸は歎は物思ひ、逆樣な追善供養、受る不孝の勿体なく、ながらへ有し今日只今、親子の縁も、槿と俱ゑちり行、は名殘、ヤイ濡衣、我最期を歎ず共、母ゑ力を付奉れ、さゝいへ目かいの見へぬ身を朝夕心の樂しみゑ、くらしたそちが胸の内不便や便も有まじと、涙呑込手負のくるしみ、見るゑ悲しさ

濡衣が、つい假初のお障より見へぬは目を明暮よ、苦よ病給ふがおいとしくどふぞお目の明樣とは符お札もあらゆる神はだし參りのお百度よも、叶わぬのみかお命迄今を限と成たるわ神も佛もない事かと涙の限り、くどき立くどき立れば奥方も、かゝる憂目を見まい爲心盡した兵部さへ今よ歸らぬ怖さ、思ふよ違ふ浮世やと手負よひしと抱付泣溺てがれ伏沈む、ヤア聞たくもないよまい言早首刎てくれんず、刀するりと拔放せば、のふコレ今が別れかと悶る奥方濡衣が、歎とゞむを押退突退、村上が、ふり上る刀の下、手負わ合拿ぱつしり立切、生死の境、かゝる事共白洲の内あやしの辻駕ゑいさつさ、跡よ續て板垣兵部老の心もせき立足元、ヤレ〳〵どめつそふな旦那殿ッア一里ゑやッア半道ゑや、急げ〳〵と息もさせず、上の諏訪から、十七八里夜通しの早追、極の駕賃お心付わ、お心次第、結構そうな旦那殿、酒手も定し結構なお金ずつかり下さりませと、汗押

ぬぐふ其中ゑ、兵部い切戸の鍵しつかり、駕代もくれふ酒手もくれふ、こなたへ來れとやり過して大げさ切、ナフ悲しやと逃出す相肩眞二つ、二人を去とめる刀の音ゑ恟り驚駕の垂明て逃出る籠作が、ヤ、ヤ〳〵、私いは領分ゑ住百姓博奕い打ず喧嘩い嫌ひ、成敗ゑ合科いない、は赦されて下さりませと、齒の根も合ず震ひゐる、ヤ、音高し〳〵、は身の上ゑ氣遣なし必騷給ふなと座敷へ伴ひ親ふ中、奥方一間を轉び出、ヤレ板垣か遲かりしと跡い涙ゑ取亂す、ホ、嘸お待兼、併は用の品も首尾能調ひ、只今同道は慥び下さるべし、奥樣ヤ常盤井樣と、いへど諸も泣入母、ハテ心得ぬは有樣、何ゑもせよ委細の譯もかつしやらず、泣てござつて事濟か、勝頼樣いどこゑでござる、ナ、其勝頼ゑあいしてくれんと首提て立出れば、ヤア、こりや若旦那のは首、すりや早はさいご逐られしか、ヤ、はつと計ゑ腰もぬけ、胸も張裂うろ〳〵眼、拙者めが心充の事有ば、譬いか樣の事有共、必聊爾の出來

ぬ樣と、ヤ置た兵部も待ず、天よも地よもかけがへなき大事の若殿殺して仕廻、泣て濟か悔んで濟か、エ、云がいなし共、胴欲共、いふて返らぬ此有樣、いたいしや殘念やと拳を握り齒を嚙ゑめ五臟を ゑぼる計也、サアごくよも立ぬよまい言、泣たか綏りと跡で泣と、首提て村上い旅宿を、さして立歸る、跡見送つてうろ〳〵と身の納りを簑作が、ヤお侍樣私いもふお暇ヤます、マア人よ何の合點もさせず、何やらよい事が有おれ次第よ成て居いと、むりやりよ駕へ捻込連てござつた此屋敷、さつきよからの樣子を聞ば私を身がいりよするのゑやげな、どこの國よかめつそふな、人の首を斷なしよ切ふとい、むごい氣なお侍樣、畢竟身がいりが遲なつて、間よ合なんだりやこそあまの命、ヤ、どふやら思ひなしか、首筋元がひいやりする、ヤレ〳〵こいや恐ろしと、ぞゝ神立て立出れば、サア一大事を ゑらせ其分よ歸されず、不便ながらも覺悟せよと、切込刀かいくゞと鍔元ゑつか

と片手よ握り、身がいりを遣ふたといふでいなし、正眞の首渡したを誰知た迚何の大事、そしてマア人の命を澤山そふよ、瓜か茄子切樣よお赦し有と突放され、ヤア土ほせりよ似ぬ不敵者、彌助歸されずと、又切付れば身をかいし、無刀のあしらい手練の切先危く見ゆる後の障子、兵部が臀ぐつと引寄一刀遁痛手に七轉八倒、こいそもいかよと常盤井は前障子さつと引明れば、血刀さげて信玄公、悠〻然と立給へば、はつと奥方簑作も身をへり下り恐れ入、信玄一間を玄づ〳〵立出、勝頼が最期よも出合ず、今又兵部を手よかけし某が所存の程、嘸常盤井の不審ならん、ヤア〳〵濡衣いひ付置し物はや〳〵持いらへも涙ながら、夫の血汐よ染なす片袖なく〳〵は前へ指出せば、信玄は手よ取上給ひ、十二年の春秋を、我子と思ひ暮されし勝頼こそ、夫なる兵部が實の世悴は身と我が血をわけし、躰といふいあの簑作、改めて親子の對面、致されよと、思ひも寄ぬ詞よ

惱り腹切た勝頼い我子でなく、此義作が、眞實のこ、其證據い此血汐と、ほはかせの血片袖ゑ押あて〳〵押ぬぐひ、是見られゑ此血の、外へもちらず合體せしい紛れもなき親子の血筋十七年以前勝頼誕生せし砌其板垣も一子をもふく、其子が面ざし我世悴と似れば似る物生寫見分難がきやつが悪念、人ゑらぬ間ゑ摺かへ置、己が世悴を主人とあがめ主人の胤を我子となし、己が手ゑも育ずして病死と偽り、信濃の國の片邊へ一生不通ゑやつたる事、天眼通い得ざれ共即座に知たる此信玄、ゑつくき逆心一分だめしと思ひしが、今戰國の時ゑいたつて、人の子を我子とし、我子を他家ゑ育るハ智謀の一つと奥ゑも語らず、不通ゑやつたる其先へ我手を廻して育し義作虚の圖をはづさず、主となしたる己が子ゑ自然とかゝるけふの災、因果の廻り來るとい玄らず己が躰が身がぬりゑ、大恩請し主人の子の行衛を搜して、連歸り、又殺さんとはかる人外め

國賊とやいはん人面獸心、天のば罰思ひ知れと扇を取てて〻〻、はつたとけすへし信玄の、詞よ玄つたる我子の身の上、かゝる野心の者共玄らず、忠義一途の侍と思ふたが面目ない、それに付ても此裝作信玄樣のば子とい知てか但玄らずよか、其義い我を育たる乳母がとくより物語、又父上よも是迄よ忍び〻のば對面、稚い時か百姓の、家よ有しも父ばのお指圖とい云ながら系圖正しき武士の弓箭の業い目よも見ず身い鋤鍬の泥まぶれ憂よやつれしその姿、今改て親子の對面、衣類大小早〻持、先暫くと押とゞめ京都の武將義晴公わへなく討れ給ひしより、父を始諸大名へ疑かゝる今此時夫故よこそ勝頼よ腹切せしも父の云譯、いまだ立共立ぬ共、知ざる中よ某が又勝頼と立返らば彌疑ひ一身よとゞまり難き此館、身を民間よ育を幸、此身此儘裝作と、白洲へおりて簑と笠世よふる雨い玄のげ共、我身よかゝる横玄ぶき洩て姿も濡衣が

始終を聞て覺悟の刀、透さずとゞむる强氣の手負刃物たぐつて我腹へぐつとつき立引廻し、ァ、恐ろしきい天の照覽主人の罰、信玄公の仰一〻違いぬ我惡心、躬を國の守とあがめんと、子故の闇みゑ眼くらみくらみ〳〵て躬が眼病藥祈念も叶いぬ筈、勿体なくも此主人をがいせんとせし大罪人、逆磔ゑも行はれず、大將の此手ゑかゝる有難さ、濡衣此館の此重寶、諏訪法性の此兜、今鎌信の手に入たり、汝も信濃生れと有ば、今の命をながらへて、何卒國へ立歸り、方便を以て兜を奪取、勝頼公へ奉らば、親と一つでない世悴、死後の云譯此上なし、奥樣お赦し有て此願ひお聞届下さらば、生〻世〻の此厚恩と伏拜んだる四苦八苦、不便と奥方濡衣引立、大惡人の兵部なれ共夫ゑい染ぬ勝頼が孝心、玄らぬながらも親子となりし緣有ば濡衣を親里へ返すがせめて手向草、尤なる母人の此計兜の事も捨置れず、今腹切て死たる勝頼、親と一つでない云譯、忠義

の仕樣い濡衣が心次第と死を留る、詞よ道死れもせず、ほ意よ隨ひ法性のほ兜、命よかへて取かへさん、調ホ、適出かした此裝作、猶も姿を下賤よ略し、義晴公を討たる敵草をわかつて尋出し、調其時こそい勝頼と、立返つてほ對面と、早立出れば信玄聲かけ、調義晴公をがいせしい四海を望む叛逆人、中ゝ輙き敵よあらず特よ手練の飛道具、いまだ日本へ渡らぬ、兵器譬ていはゞ眞此通と、用意の鉄丸車輪の如く投付給へば、透さず笠よてひらりと受留、火よ德の有物い水よ德なし、調諸葛臥龍が工夫の地雷、火玉飛ちる術有共我方寸よも大川有、何かい以て恐るべき、未日本へ渡らぬ鉄炮夫こそ究竟詮議の手がゝり、尋出すい眕間、追付歸り裝作が身の納りい其時〳〵、其ときいねよ濡衣が暇ヤも涙よて、物のあやめもなき夫よ、似たるあやめや杜若、花紫の明方い、盛と見へし槿も今い名のみぞ勝頼の、ほ手へ顛て、鳥兜、花よもなせし惡業の有て其名い鬼あざみ、因果い廻

る日車よ法の此身と絶入兵部、不便と見やる信玄い仁有、智有勝頼よ名殘奥方女郎花、桔梗、かるかや秋の野の月よ、名をふる更科や信濃路さして、いでしゆく

○第三

名も山深き信濃路よ、誰しき花の名よ呼し爰ぞ桔梗が原とかや、甲斐と越後の領分よわけて立たるさい目の場所、馬草を苅よ奴らさ、一本きめた刀ゐ研立鎌でくいつさくいさ踏あらしたるめい〳〵が主の威光をかり場の領、是も同じく二人連、籠よ枡を指荷ひ、見て恟りのどつてう驚下主め、うらが部屋でいついよ見た事もないゑやつ頼共、誰よ斷此馬草を苅ほした、悪く言譯ひろいだら二人共よ首が飛、盗人めらと云せも、立ず、下主の口から下主呼いりゑやらくさい、添くも甲州の主、信玄公のお馬の飼領、うぬらが知た事でないすつこんでけつかれと、猶も引ぬ

く手先をとらへ、此印が目ゑ見へぬか、甲斐の領分ゝ是ゑ東、西ゝ越後領分と書て有ゝ、うぬらが眼ゑかゝらぬか、盜人といふたが誤りか、サア〳〵何とゝきめ付られ、返答こつゝり後から握り拳を二つ三つ、傍輩をぶたれてゝ後日ゑ主君へ云譯立ぬ、やぶれかぶれと二人の奴、いどみ爭ふ折こそ有、兩人共ゑ之づまれと、聲襠の裾けはらし、高坂彈正が妻の唐織、越名彈正が女房入江、夫と指圖ゑ媚共用意の腰かけ奥家老の、女房と見るより下部共、わかつてこそゝ蹲る、入江邊ゑ、心を付、誰ぞと思へば馬屋の沓藏百内、何故の爭ぞ、事ゑよつてゝ聞捨られず、包ず語れと尋れば、ヤイ〳〵、喧嘩の元ゝ馬の飼領、信玄殿の家來とぬかし、此方の領地へ踏込、苅あらせし狼藉者、我〻ゑ見付られ、云譯なさの摑合と、語る中よりもふよい〳〵、夫でさつぱり樣子が知た、國がかわれば心迄かゝればかゝる、甲斐の國ゝすべて盜賊はやりしと、人の噂もうそでゝないと、あてこすち

れて唐織も、むつとゐせしが押えづめ、互ゐお主の確執よりおのづと隔たる兩家の中、家來の仕落ゐ幾重ゐも。お詫ゆ筈成共、只今のお詞ゐ、すべて甲州ゐゐ盗賊有とおつえやつた、其一言が承はりたい、ヲ、唐織樣とえた事が、何の根問ゐ及ぶ事、元此信濃ゐ村上左衛門義清殿の領地成しが、謙信樣と信玄樣兩人して切取給ひ、此所ゐさいめの印、夫を知つゝ、狼藉せしゐあなたの此家來、國の守の扶持人さへ是えや物まして町人百姓ゐ猶以て狼藉するゐ知た事、イヤおつえやんな、印有とゐ云ながら、一つゐ續し原なれば、過て踏越しもせはゞ下郎の苅取草、イヤ下郎ゐもせよ誰ゐもせよ、其過をさせまい爲、建たるぼう木ゐ國下の禁制、花咲木ゝの枝迚も折取まじと記せしを、手折ゐ則落花狼藉、此領分の印ゐ限らず譬、白紙ゐ書迚も、事を制する理ゐ等しく、是皆國の敎として掟を守るゐ貴人より下ゝの掟とする、謙信樣の息のかゝつた領地へ踏込草一筋でも苅

取たい、國を盗も同じ事、其儘よ指置てい夫彈正が越度、女房の身としで見て居られず、高坂樣いとも有私が夫彈正殿、ついよ一度も名を穢せし事なければ、お前の殿ぼと一口よいはんよいふても下さんすな、コリヤ面白い開所、お前の殿ぼが執權なら、私が夫も執權職、イヱくそりやお前の胸一つ、深い樣子い云られぬ共、侍衆の口くせよも高坂樣い逃彈正、こちの夫い鎗彈正、人よ勝た鎗の上手と、逃足早いお侍とい異名さへ違ふ物、まして心の内外も違ひやんすとはのめかす、イヤコレ入江樣、武士の身い情よよつて、引も逃るも軍のならひ、チ、よい口な事おつしやるな、情でそんな異名を取、武士の法がでざんすかと、いいれて唐織當惑の、何とせんかた此場の無念廣言憎しと思へ共入込だ越度といひ、夫をさみする詞の端、聞よつらさもいやまさる、涙隱して入江樣、花よよそへ名よ顯はし、非を改るお前の存分かへす詞も家來の仕落、今い此儘歸る共滿れば欠るの道理よ

て、けふのお禮ん重て急度、そりやおつしやる迄もない、私が方よ非太刀ん受ぬ此以後主人の領分へ、露程もお障有ぐ、二度と赦しん致さぬと、殘す詞も針の先、眞綿よ包む唐織が、立寄所をとゞむる下部、せひも涙の道筋を左右へ、てそん別れ行、爰よ信州筑摩郡の邊よ住、慈悲藏といふ者有、生得親よ孝心の道ん昔の郭巨よも、かんらでつもる年の數、三十の上ん漸と二つか三つの稚子を、抱入たる懷の内曇なる、冬の空寒を凌ぐ種ならで歎の種となりふりも、忙然として行めり、誠や人間の吉凶ん、生るゝ時の運よ任すといふ、母の胎内を出しより誕生の祝儀迎、さゞんざ諷ゝ悦びん、貴人高位んいふよ及ず、下万民の我ゝ迄も、悦びよ悦びを重るが親子の緣、夫よ引かへ其方ん、わづか慈悲藏が所と、生れ來るもそちが因果、親の心子知らずと我肌付れば現なく、結ぶ樂花も夢の夢、ぐわんせなけれど聞てくれ、親として子を捨るん、人間ならぬ境界と、笑ひし此

身よ廻りきて、今といふ今其方を、爰よ捨置此親が獨の母へ孝の爲、捨れば拾ふ神佛の、力をかつて成長せよ、親と思ふな子でないと、思ひ切ても切兼る、產の母が歎といひ、我も不便さ身にせまれど、そちをかばへば不孝と成孝を立ればそちが難義、理よせまりたる思ひ子を捨る此身の孝行より捨らるゝおとが孝行むでいとばし思ふなと云譯、涙目も明ねば、そつと傍よ置土の上よ伏たる稚子が、わつと泣出す聲よ惚り抱上、泣を道理と爰かして、山を越て里へいた、里の土產の見納めと、抱去むれば すや〳〵顏、遠童の氣さんじと打守り〳〵、名ん慈悲藏の慈悲もなく、今目前よ捨置て歸るとえらぬ心根を、思ひ出せば不便やといと、涙のやるせなき、我ながら誤つたり、心よいくて叶んじと、包廻せし絹の、香の、思ひん二重胸の闇元の所へ押直せど、えらぬ子供の寢入ばな一世の別れと諍を、跡よ殘して雪國のつもる歎とえられたり、かゝる折ふし甲斐國

の執權高坂彈正時綱、供人數多引具して當所筑摩のに社へ詣の道もほう木の傍件の捨子ゑ眼をくばり、人音希な街道ゑ、捨られし稚子ゐ犬狼の餌食ゐ治定見捨るも本意ならずと、家來をとゞめ歩寄ム、最早水子といふでもなく、男子と見へてけ高き寐顔、いやしからざる者の躰何故爰ゑ捨置し、子細ゐいかゑと見廻す小袖の絳紐ゑ、付たる下札手ゑ取上、何ゑ甲州の住人山本勘助と、讀も終らずふしぎの顔色、此山本勘助といふゐ、生國ゐ三河の者、山賤と見へて魂ゐ異國の韓信孔明ゑもおとらぬ軍著主人兼てに懇望、かゝる乱世の其中でも、諸方ゑ招く今日只今、此稚子ゑ名を記捨たる主こそ芳き、勘助を味方ゑ入る信玄公へよき土產、ヤアく著共身が屋敷へ連歸れと、詞ゑはつと若黨中間、抱取んとする所、高坂殿暫くと、聲をかけたる立派の侍、家來ゑつかせし鎗印、長尾入道謙信が郎等、越名彈正忠政、我領分ゑ打通れば、高坂ゐ甲斐の領ぼう木を中ゑ狹箱、

不和成中の兩執權すゝ事こそと下部迄かたゞを、呑で聞居たる、調何高坂殿、只今物かげゝ承れれば、是成捨子が下札よ、山本勘助と書付し故、お拾ひなさるゝは所存尤とゝ存れ共、見まする所双方の領分へかゝり合せし上ゝ、貴殿の儘よも成ますまい、手前の主人長尾、謙信、日比望し折よ幸、其姓名を書顯ゝし爰よ捨しゝ某が、願ふてもなき忠義の一品、貴殿よやつてゝ武士が立ぬ、せひ連て歸りたくば、戰正が首諸共、さもない中ゝいつかな叶ゝぬ、ホ、さい目の論なら金輪際拾ゝよやならぬ稚子が、踏だる足ゝ、手前の領分、イヽヤ左よあらず、物の始を頭といへば、此方の領分を枕とゝたる山本勘助、越後の國の旗大將、見事貴殿ゝ拾ひめさるか、ヽいふよや及ぶ、我方へ踏延したる足元が、肝心要の甲斐の國、高坂彈正が拾ふて見せふ、イヽヤ越名彈正が連歸る、イヽヤならぬと刀の柄、理を非よさせぬ詞詰爭ひ爰よ二人の女房、とくより立聞此場の時宜、見やる眼も角菱の、めい

〳〵夫を押隔高坂が妻異儀繕ひ、及バぬ私が一思案女の差出がましけれど、彈正殿聞えやんせ、甲斐と越後の領分へ捨置し稚子ハ、兩家ゑ望山本勘助、是を手筋ゑ召抱るお前方の胸の内、一方へ拾ハれてハせひ一方の國の恥、其爭ひの基と成、肝心の此子ゑ乳も呑さず、若もの事が有たらバ、お望も水の泡、何ゑもせよ兩方ゑ、乳房含し其時ゑ、いづれへ成共呑付方、夫を印ゑお拾ひ有バどちらゑひけもおとりもないと、わえや思へ共跡や先思案えてたべ我夫と、遁女の智惠の海、實高坂が妻なりし、女房出かした、爭ひどゞむるちぶさの闘取、幸そちが持合せし乳をあたへて心見せん、彈正殿も相應な乳母でゐ有バ出されよと、入江ゑ曾たる詞の端、聞ゐくハつとせき立入江、おかもじ樣のは思案ゑ鼻毛延した今のお詞、越名彈正忠政か女房乳母奉公ハ致さぬぞ、今一言おつえやつたら、赦しハせぬと腹立聲、〳〵馬鹿者、大事を前ゑ、置ながら、無益の舌の根動すな、

イヤ何高坂殿、負た子ゑ教られるとやらで、内實の詞ゑふくし女房〳〵が乳を勸め、どちらへ成共形を付、此場の別れいかゞこざらふ、ホ、そりや此方も望む所、呑か呑ぬい互の運づく、唐織早くとすゝめられだくつく胸も押ゑづめ、抱上れバ目をぱつちり、明て三の稚子が、わつと泣出す口の内、ちぶさふくめてすかしても、呑躰さらゑ見へざれば、見合す夫婦が顔と顔、コレヤ唐織樣、何ぼうすゝめさゑやんしても、子供いどふでも正直な、わしがかいろと抱取入江、心ゑ拜む神仏も頼ゑ思ふ此乳を、たつた一口呑でたもと、ゆぶりわるけどけがな事猶も正体泣さけぶ、聲をとめんと手ゑ汗を、握り詰たるいたいけも、ゑくやとすねて置露の、頼もつなも切果し入江が思ひ唐織も、殘り多さゑ又立寄、すかしなだめて抱上れバ泣やむふしぎ女房より、高坂彈正大ゑ悦び、軍師山本勘助、信玄公のお味方と、いわせも立ず、ヤア〳〵くらい〳〵、兩方共ゑ呑付ねバ、未善悪知ざる中、

其方へ連歸る、其譯聞んと詰かくる、合點行ずばよく聞れよ、入江殿が抱上れば、歎い治定、あの如く身が女房が手よ有中、泣ぬが緣有是證據、又三よい、甲州の住人、山本勘助と有からい、紛ふ方なき手前の領分、最前ちらと承いりしが、越後領へ指さゝば、此後い赦さぬとやらソレは內實の詞も有ば、是迄もまつ其如く、稚けれ共甲州の町人、其元がお構あらば却て狼藉國賊の、名を取るか彈正殿と、先よかけたる詞の裏釘、折返されてさしもの彈正、返答せき、切女房入江、思へば無念と唐織が、抱し稚子無理やりよ引取ばわつと泣、是い無體な入江樣さつきの喧嘩よ負たるかいり其子計い叶いぬと、あなたこなたと挑あふ、裝はら〳〵妻と妻、顏いはのめく薄櫻亂ちつてぞ爭ふ風情、一度よわくる夫と夫、中よも高坂聲勵し、實やいたつて正直い頭よやどる神の慈悲、一陽の春を待雪中の梅よも增る主君の悅び此身の忠義、さればいな、お慈悲深い信玄樣のは威勢が

顯れて、私が無念もたつた今、サアヤ入江樣最前のお詞よお前の殿にを何とやらおつゑやつたが、今一言に所望と、嘲る女房、ホ、、聞たくば名乘できけん、長尾入道謙信の郎等、越名彈正鎗彈正、イヤモ天晴手練の此鎗先、受ていたまらぬ大事の稚子、連て手前ゝ逃彈正、唐織來れと立別るゝ、胸よ一物二人の彈正、爰よ、捨子の隨一と、其名も高き山本氏伴ひ、歸るぞ「ゆゝしけれ、秋の末より、信濃路ゝ野山も家も降埋、雪の中なる、白髮の雪、女ながらも故有て、男のすなる名を名乘、山本勘助と人毎よ、岩間の水の音たへて、木の葉の衾二つ三つ年も幼氣、稚子をすかすお種が手枕よ、ねんねが守ゝどこへいた、山の薪をゑいさつさらば爰らで一休、お種女郎冷ますの、チ、正五郎樣戸助樣、雪吹で外ゝ歩かれまい、お茶もわいてござんす、イヤ！搆ふまい子持ゝ手が放されぬ、慈悲嚴殿ゝ留主か、けふもけふと寄合とあの人の噂お袋への孝行ゝ申す愚兄への深切、ほんの子ゝ次よ

して兄貴の息子の其次郎吉を、太切よゝらるゝ女夫の衆の心いき、名も慈悲藏といふか尤、サレハ〳〵夫よ又兄の横藏殿、兄弟迚あの樣よも違ふ物か、親への不孝さ弟への、むごさ、親兄弟よさへあをゝや物村中で持餘すが尤、外を家と出あるいて隣邊へたゞれ込人の娘下女婢あたり合よ承し、其おこもりのあの小躰も、親よ似た子の鬼子であろと、口いさがなき山道を、ゆがまぬ武士の梓弓胸の袋よ押包、孝をはづさぬ慈悲藏が獵漁も母の爲流よ添て立歸る、ヲ、孝行者お歸りか、佛性な慈悲藏殿、殺生よ出られたもお袋への養ひか、夫程よさつゝやつても氣よ入ぬあのばさまい、去といきつい片意路者、ア、これ〳〵勿体ない事いふて下さんな譬身を粉よ碎ても、胎内に有から今日迄の親の苦勞、くらべて見れバ百分一、あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩よ三枝の禮有迚諸鳥よ勝て孝行な鳥、どこから共なう此家の軒へ集つてきたるも、慈悲藏、が心少い通じ、類を以て集つ

たか、と思ふて嬉しう思ひます、成程夫れこちとらも去書物で見て置た、烏い親の養ひを、育かへすといふ本文、おれが毎晩女房よ、孝行よする心が通じて、烏がかあ〳〵かゝの顔、いんで見よふと出て行、母者人い最前からまだ休なされてか、巨燵でお風ひかしますな、お目の覺ぬ其中よ、お肴料理ゑて上ん、次郎吉も寢入たか、ハイ此子が機嫌よふ育よ付ても、氣よかゝるい峰松が事、ほんよ兄ぼの横藏樣、いかよ我子でない迚捨て仕廻と無理計、お前が外へ出やゑやんすと、私を女房よせうの何のとつらい悲しい事聞も、お前の孝行立る爲と、辛抱するよもゑられぬい眞實な子を胴欲なよそへやつたといいゑやんすが、まあ其先い何國の誰、夫を問がもふ未練、氣遣ひ仕やんな此貧家よ置ふより、乳母ようばを付る結構な内へ養子よやつた、わいついきつい果報者、もふ思ひ出さずとゝんと捨たと思ふて居や、病煩ひといふ事も有、萬一先で死だらない昔ゑ

やと、諦ておりやゐる氣ぢやと、云ながら、犬狼の餌食共、成ンせぬかと子を思ふ心ン一つ一間の中そつと窺ひ、是ン扨、寐入てござるかと思へバ裏へ出てハ氣丈千万、お巨燈よ火も有か、追付ハ膳の用意も仕やと、片時忘ぬ孝心ン、又と、類ン嵐吹、音も雪吹よ高あしだ、踏分尋來る人ン、長尾三郎景勝、万卒ン求安く一將ン得がたしと、此隱家の弓取を幕て一人門の口、二重の腰の白妙よ、枝もたン〳〵の雪折竹、杖と我子よ助られ、庭よ、イ老女の風情、ヤ〳〵此大雪よ去とてン冷まする、蒲團の上よござつてさへハ老體の身の上、ひらよあれへと取手を拂ひ、七十よ餘つて愚鈍よン成たれと、子供よ物ン教られぬすべて親よ仕へるよ起臥の介抱ン誰もする、何事よ寄ず親の心よ背ぬ樣よするのが誠の孝行、寐て計居るも氣詰りさよ、雪の景色も見よふと思ふ、母が心を妨るン何と不孝で有まいか、ハ、ア一〳〵誤り奉る、其段よン心付ず、お年寄れて一日〳〵ハ氣力の落るが

悲しく今日も獵よ出、元氣を養ふ谷川の、ます〳〵お達者成樣と、志の達物賞翫なされ下されかし、イヤ〳〵物の命を、取夫が何の養ひ、眞實親の養ひなら、とをい山川の珍物よりつい裏よ有竹藪の筍を堀てこい、ハア夫いは意でいでざれ共、此寒の中よ筍が、サア有物を取て來るい子供でもする事、ない物を取寄るが本の孝行、かういいゞ母が難題云付ると思いふが、此位の難題よてまる樣な器量でい、智者と呼れて人よ云らるる人、弓取よいなられぬぞよわちいが夫い天が下よ聞へし軍師、一生主人を取ず過されられた忘筐、兄弟の子が器量を見定る迄い、女ながらも夫の名を付、山本勘助と名乘此母、二人の內よ勘助といふ名を讓、父の軍法奧義の卷を傳ふとい思へ共、夫でい中〻勘助よいなられぬ、サア其苗跡を受たさよ、心を盡す此慈悲藏、ソレ〳〵其名がほしさよ孝行盡すい眞實の孝でいない、上皮の僞り表裏、コレ夫いお情ない苗氏を望も出世して、母人の悅び顏拜たい

計、兄者人の心入と一つゝ思し下さるゝに、餘り難面に心と雪ゝ、喰付落涙ゝ、老母に猶も腹立聲、何ぼ利口ゝ云廻しても、此年月膝元を離れ他國して居て、けふ此頃俄の深切是が僞といふ證據儕が心ゝ引くらべ兄を不孝と云なす惡心、思へば見るもいたはしと、杖ふり上て打んとす、老の力身ゝ踏くじく駒下駄飛でよろめく足、あぶなやと抱きとむれば、イヤ〳〵已が世話に受ぬわい、そこ退かれと親と子の、心合ざるかたしの下駄、景勝透さず拾ひ取に召物是ゝいと、老女が前ゝ押直し去さつて頭を下らるゝ、母つく〳〵と打守り、人品骨柄只人共見へぬお侍賤いばゞゝ履物を直されしに、黃石公ゝ沓をあたへし張良が俤、奥床しきに方や、お近付ゝも成て、とくとお禮もヤたい、慈悲藏其方ゝ用ゐない立て行、ヂはつと、何か子細に有そ海母の心を計兼、是非なく奥ゝ入ゝける、いざとなたへと請ずれば、辭する色なく座ゝ直り、に推量少も違ゐず、黃石公

よ劣ぬ軍者、山本氏のは子息を召抱て、一方の大將と頼ん爲、身不肖なれ共越後の城主、長尾謙信が嫡子三郎景勝、是迄參上仕ると禮義正しく述られゝば、扨こそ〳〵、始方自然と備ゝるは眼ざし、シテは望なさるゝゝ兄弟の中兄か弟か、イヤ景勝が望所ゝ惣領の横藏、ハテナ最前方は覽の通、孝行な弟慈悲藏を指置不孝な兄の横藏を、は家來よなされふとおつしやるお前のお心ゝ、イヤそりや其方よ覺有事諏訪明神の社内よて、面體恰好とつくりと見届置た横藏、せひよ身共が所望致す、ら、そふおつしやれば。思ひ當る、よく〳〵よ思召ばこそ大名のお手づから、いやといゝさぬ此ばゝよ、下駄を預給ひしゝ天晴利き殿ぞかし、兄ゝ只今他行なれど、此母が成かゝつては家來よ差上ふ、過分〳〵、其箱是へと取寄て、いかよ老女、主從と成からゝ、一命を捨ても忠義をはげむ、武士のならひいふよ及ばず、此方迚も一身を任すといふ、かための一品受取れよ、若違變あらば身の上

たるべし、念に及ばず其時は母が皺首差上るか、家來にするか二つの安否、後程〳〵老女、さらばと詞詰、威風尖き北國武士、越後ちゞみの物馴て引ぬ其場の、信濃路や別れて、こゝに歸らるゝ、木曾山木立あらくれて、無法無徹を云はせて名も横藏のすじかい道、草鞋の日もふり埋む餌竿、かたげて門口に、母者人今戻りましたと、聲に老女がはや〳〵顔に、兄待兼ました、此間は〻どこへ行て居やつた、こなわろは、おれが足でおれがあるくにどこへなと飛次第、飛ついでに戻りがけ小鳥十羽程取ふと思ふて、顔も足も切る樣な、道理〳〵、ちやつと上りや〳〵と草鞋の紐手づから母の慈悲藏も、足の湯を取機嫌取る、兄者人お足洗ひましよイヤコリヤ〳〵孝行な兄が體に不孝な弟が手をさへるは穢はしい、母が洗ふてやりましよと、一人につらく一人には甘い女子の鼻の先、泥脚突付、若い女子の手のさはるはよい物ぞやが、干物の樣な母者の手で情の罪

科玄や、いか樣おれい孝行者、此小鳥も晩の夜食よ、こな樣よ喰すのじや
ない燒て貰ふておれが喰ふ氣兎かくおれが口さへ養へば、こな樣の氣
が休まるのふ母者人、そふ共〳〵あのこア孝行な事わいの、サア〳〵火燵よ火
も玄て置た、ハ、こな樣が今迄あたつてゐて何の恩よきせる事、エ、こりや
ぬるい水火燵じや、イヤ〳〵あんまりきつい火い上つて悪夫がたわけといふ
物、もふこなたも追付火屋へ行體稽古の爲よきつい火よも當つて置
玄やれ、サア足もんで下あれと、踏出す兩脚慈悲藏見兼、ドレ私がと立寄ば、又
差出るかこ玄やく者、兄やこふか〳〵と撫さするほんそ息子のくいひ
ら足、デ、迚もなら美しいお種がもんでくれりやよいよ、ハア貴樣子守か、峯
松いどふした、ハイお差圖の通、思ひ切て一昨日主がどこへやら、ハ、捨て仕
廻ふたかよい事〳〵、一体おりや貴樣よ惚てゐる時よ幸とかし、のそげ
めいてこねて仕廻ふ、跡よ殘つた小幹の其次郎吉邪魔ながきめ玄め殺

さふかと思ふたれど、わぢな物で子といふ物い親よりちつと可愛物ぞや、又大きふ成たらおれよ似て孝行よも云おろかと思ふて、貴様よ育さすからい慈悲藏畢竟わがみと相合の子、迎の事よ女房も相合よする合點お種顔ふらずとムンといやいの、夫をいやといふと慈悲藏が大事がる此母者よ當るぞよ、コレ云つか〳〵と揉云やれこ、まだ火がぬるいと戀の意趣を、巨燵よわたる非道者、持餘してぞ見へよける、折ふし表よ先走、山本御助殿よ用事有て、大僧正武田信玄參上也と案内よ、思ひがけなき夫婦が不審子細あらんと横藏が、起も直らずそら寐入、扨思ひ寄ぬ大身のお入、卒爾よい母も逢れまい、慈悲藏饗せ、横藏是い云たり、何やらいひ〳〵寢入たそふな、風ひきやんなと一間の障子引立窺ふ表ゟ匂ふ留木の高坂が、妻と知せてうづ高き雪の懐稚子を抱て、幾重の、柴の庵、家來い先へと退かへし、行義正しく打通る、いぶかしながら手を付て、信玄公

のは入と思ひの外なる女中のお名い、チ、成程は不審尤僞りならぬ信玄公のコレ此寐顔よ對面なされと、いふよ女房立寄て、ヤア峯松か戻つたかと、飛立計の胸押えづめ、是い〳〵は苦勞樣やそんなら峯を貰ふて下さりましたいお前樣か、いかゐお世話樣よ、コレ〳〵麤相いふまい、甲斐ノ國へ養ふからい最早一國の世繼、則今日の信玄公、孝心深き慈悲藏殿、殊よ軍術の達人と聞及び、師範共お頼みなされん爲わざ〳〵見やしやんせコレ愛らしい此信玄が抱よ來たお受ヤされてよからふと恩をかけたる名將の、情い肝よこたゆれど、とぼけた顔で、是い云たり、私い此在所の山がつ、鋤鍬の外何よも存せぬ者を、軍術の師範なぞとい、勿体ない事おつ云やります、コレ〳〵こちの人、お前の器量を聞及んでと有からい。きつい譽な事也やぞへ、卑下するも事よ寄、ハテ軍法奥義い、母樣の傳授の卷を讓請て、されぺいやい、夫を貰ふて山本勘助よ成たれぺ抱られまい物でもなけれど、

未生もかへぬ中ゑ軍術の大將のと、そりや山の芋をかば燒ゑする樣な物、名さへ慈悲藏迚虫さへ得踏殺さぬ者が、軍ゑ出て人の首が、何として〳〵と、取ても付ぬ顏付ゑ、唐織はつと胸せまり、不調法な〻の使ゑ氣ゑ入いでおつゑやるのか、どふ有ても味方ゑ付て貰いねばならぬといふ其譯い、桔梗が原ゑ此捨子、山本氏と有書付を、印ゑ拾ひ取い取たれど、どふも力ゑ及ばぬい肝心の乳ゑ呑付ず、なんぼ抱て突付けても、あつち〳〵と指さして泣てばつかり、此大將ゑ兵粮がなければ命も危し、其兵粮を續る謀い慈悲藏殿、お前の心ゑ有そふな事、甲斐國へ味方ゑ付て、夫婦して守育ふと思ふ心いでざんせぬか、此ァちつとの間ゑコレどこもかも、細つた事を見やゑやんせ道理でも有、眞實の母ぢの懷を離て、他人の手ゑ何の育ふ、夜い得寐ず、晝いうつ〳〵泣寐入ゑ、寐た顏のいぢらしさ、ほんゑ見るめが悲しいと、語る中ゑ女房がァ、かいいやそふでざんせ

うと、わつと泣出す母親の、聲よ目覺し、玄がみ付すがる乳ぶさに一人よて、この手柏の二面儘ならぬこそ恨なれ、一間よ母の聲高く、慈悲藏子供を餌よ恩よかけて味方よせんと、後ぎたない信玄よ奉公玄てに武士が立まい去ながら、軍法奥義も傳にらず、家の苗跡を繼氣がなくば勝手次第ともぎどうよ云捨障子、はたと指、パアはつと立上り、我子を取て引はなし、須彌山滄海の大恩を受れば迚、母の恩よにいつかな〳〵信玄よ仕ゆる事存じも寄ず變改ア、コリヤ女房、一旦捨た此躰よ見苦しい何ほへる、縁よ引れて知行取てに末代迄の名折、親子の縁をさつぱりと切て玄さへば、信玄よ恩もなく義理もなし、是此竹も其本に、竹よ雀と離れぬ中、今餌さし竿と成時に、鳥の爲よに怨敵、事よよつたら親子兄弟、敵味方と成も武士道、お返事に此通、稚子連て早歸られよと、詞尖よ云はなす、パア此上に力なし、といいへ歸つては主人や夫よ何と詞さへ、なく〳〵抱立出る、

コレのふ峯松一世の別れせめてマア此乳が一口呑したいと云たふ女房を引退て枝折戸ぴつしやり、表よも心ん殘る雪中へぐんんせ、涙の子を抱おろし襠の下くゞり、くゞり添たる後紐垣よ結ぶん義理の綱神や捨置竹の子笠、いたいけつむりよ打着て、山本の氏を繼慈悲藏殿を、軍術の師と頼んと是迄來給ふ信玄公、どふも此儘でん歸られず、是非共味方よ付といふ一言を聞迄ん、此信玄ん其元の門口を立さらず、雪よ凍て死迄も爰よ座をしめ返事を待、大將の命助ふと殺さふとは思案次第、よい返答を頼入と、云づをかけたる雪の笠思ひを、殘し捨て行、そんならぼんんまだいなぬか、コリヤ〳〵門よん誰もない、よし居てからがあかの他人、今傍へ寄と信玄の恩を受たよなつて、母の一言反古よ成、此簀戸の外へ一寸でも出るがいなや、夫婦の縁も是切と、腰さげの紐鍔をくゝるむごさん我ながら、いかなる惡魔鬼か蛇か、六韜三略の望有慈悲藏、慈悲も情も知て

い居れど、母の詞い背かれぬ、ど、ふで乳房よ離た物迚もない命、凍て死い死次第、そちもソレ其子をそでよしてい、兄貴への義が立ぬぞ、ハア何かよ紛れて、大事の孝行怠つたり、ドレ裏へ行て雪の中の笥堀て進せふと、簑笠取て打かづきあつき親子の縁をたつ、鍬ふりかたげ、此寒氣に荒男でさへたまらぬ物、よたけもない體よ、ア、子を捨る藪い有ど、親の詞い捨がたき裏の藪へと踏わける、雪ゟ先よいとし子の埋れ死ん不便やと、見合す顔よふる涙、みぞれ爭ふ濡翅しほるゝ、夫の後かげ、いかよ望が有ば迚天よも地よも一人子を、よふむごたらしう捨られた、今の女中も氣の強い、置ていぬ程ならおいゑよねさしていんだがよい、かいいや〳〵ひもじからふのよ、ちつとの間なと抱たいと、任せぬつらさ次郎吉を、漸そつと下よ置さし足なから庭よおり、覗けば門よ去よんぼりと、ソレぼんよ夫が、何と命が有物ど、明んとすれど鏁よ錠のかわりの眞結びい、むごやつれ

なとあせる程、雪よゑめつて明ぬ戸よ、ちゝたい〳〵もたへ〳〵の風よ
うたてや次郎吉が、わつと泣聲、ハテ悲しやと、又かけ戻り抱上て、雪やころ
ゝん霰やころゝんこれそも何たる因果ぞや、此子憎いゑやなけれ共、我
子よ乳が呑したい、コレちとの間〳〵寐入てたもいのと心も空に、かきく
らし、又ふり立きる白雪よ外よ泣聲八寒地獄、釼を呑より身よこたへ、思
ひ立ら立轉びおり、碎よわれよの念力よ、はづるゝ戸ゟ身に先へコリヤぼ
んよ〳〵と我子を肌よ抱ゑめ泣涕、こがれ泣聲よ、唐織こかげをつゝと
出信玄公を抱上、乳房をふくめ參らすからに、慈悲藏に最早此方の味方、
夫よゑらせて悦びせんといさんで舘へ立歸るはつとゟ種も心付うろ
付隙よ何國ゟ、懷釼てうど峯松が肝先貫き息絶たり、コハ何事と驚く中、次
郎吉引立横藏が、一間をさしてかけ入ば、扨に我子の害よ成と横藏の
所爲ぞやの、義理も情ももふ是迄、敵を取いで置ふかと死骸を小脇よか

い込て常よりも弱き女氣も恨よつよき力帶奥へ、窺ふ忍び足、早日も暮よ近付て、鍾孝行の、道ぞ迎、古き例の跡を追、子故の闇に白妙の道も、涙よ目へわかず、なんぼ堀ても筍が有ふ樣りなけれど、親を思ふ一心を憐天が授る事もやと、心よ込て、一尺二尺底り、白羽の鳩一羽、飛でおりしも飼なれし、鳥も心の有やらんと、又堀かへせば又一羽友呼さそふ生類の、有樣つく〳〵打守り、最早入相、諸鳥塒よ歸る頃一羽ならず二羽三羽集り來るり、心得ず誠や、兵器有地より鳥群をなすといへり、我父り日本の軍師、此所よて世を去給ふ、一生暗じ置れたる六韜三略の秘密の巻此下よ、埋置れしやらん、扨り我孝心天よ通じ、鳥類是を去らせしか有がたし忝しと、心いさんで堀穿、雪も散亂村雀ぱつと立たる藪の中、窺ふ兄が頬魂ふ、野よ伏勢有時り歸鴈行を亂る、油斷の塒を窺ふ悪鳥、殺さふと生さふと手の内の雀、慥よ手ごたへ、此下を、待慈悲藏埋で有傳授の一巻わ

れよゝやらぬ、兄が出世の種よするゝい、兄者人そりやお前無理でござりましよ、ヤイヤイ無理いふが兄の威光、おほう烏の孝行ごかし、邪魔なうぬから仕廻ふて取、どつこいそふゝ成ますまい、苗氏をつぐゝ此慈悲藏、見事われが、ついで見せう、こしやくな退と鋤と鍬、落花みぢんの雪とんで、堀出す箱の二人の爭ひ、道と非道の二筋をすべつゝこけつ摑あふはづみよかゝと取落し、池よざんぶと、水煙さゝぐ群烏兄弟もふしぎと、見とるゝ後方、障子ぐゝらりと、母の老女兩人待、兄弟共よ武士と成主人を取べき時節到來、雪の中の筍を堀出したる慈悲藏、今こそ母が心よ叶ふた、天晴孝行出かした〳〵、そちゝ最前言付た通、裏口四方よ氣を付よ、合點か、ハア委細承知仕ると、かけ入弟横藏ゝ、池中の箱を引上て母の、ゴ前よ差出せば、ハア〳〵兄、そなたよゝわけてよい主を取する、則主人方下されし、裝束も改させんと、ざづ〳〵奥の白臺よ、無紋の上下白小袖、傍よ三方九寸

五分、我子の前ゑ直し置、母者人こりや何じや、いやさ、コレ此白裝束ハ何の爲、ヲ、夫こそハ冥途の公服、只今そちが首打て身がハりゑ立るのじやハやい、ヱ、イめつそうな事計、此首を身がハりとハそりやマア誰が、今日そちが主人と頼みし、長尾三郎景勝公のハ身がハり、聞及ぶ武田信玄越後謙信室町のハ所ゑおいて、互ゑ我子の首討て、心底を顯ハさんと契約有由、最前そちを召抱んとて來られし景勝の面體そちが顔ゑさも似たり、扨ハ母が推量違ハず、箱の中ゑ殘されし此一通ゑ、委細の樣子詳ゑ記されたり、主從と成からハ命ハ君ゑ捧し物、武士の因果と諦て、潔ふ死でくれ、コレ〳〵よふ思ふても見やしやれ、いかゑ主じや迚まだ知行もくれぬ中ゑ、殺さふといふ樣な胴欲な主が有物か、イヤ〳〵もふ此主從とんと變改、ハヤそふハ成まい、日外諏訪の森ゑおいて殺さるゝそちが命、助置れし景勝の恩忘ハせまい、其時の情ハ今身がハりゑ立ん爲、智謀のわなゑかゝりし

とゝ云らざるか、恩を云らぬ人でゝないぞよ、譬逃ても此家のぐるりゝ、景勝の家來取巻て一寸も遁れゝない、切腹するか、但母が手よかけよ、かゝ〳〵なんと〳〵と詰かけられ、籠中の鳥の目ゝうろ〳〵、透を見て逃出す膝口はつしと手裏釼よ尻居よどつさり詮方なく、是非よ及ぺぬもふ是迄と、腹切刀取が早く右の眼よ突込だり、遁の老母も不審顔流るゝ血を押拭ひ〳〵、母者人景勝よ似たるよつて身がゝりよ立たがる、小面倒な此頻よ、かう疵付て相好かへれぺ、もう身がゝりの益よゝ立まい今日只今父が苗氏を受繼山本勘助晴義、軍法奥義を胸よ貯三略の巻が太切な此命、ゝ〳〵謙信の家來直江山城助種綱、夫へ出よ云聞す子細有と、呼ゝる聲よ一間の内見參そふと慈悲藏が、優美の骨柄長上下さゝやかよ、某長尾の家臣たる事深く包て古郷へ歸し、其子細、母人よゝ密よ語り、然て申受たる兄者人の命、現在の子を捨たゝ否應いゝさぬ命の無心去な

がら、眼をくつて、身を全ふする大丈夫の魂あつたら勇士を殺すい殘念、長く謙信ゑ仕へ、忠勤を盡さるべしと、いいせもあへずあざ笑ひ、ふろかく、謙信づれが家來ゑい汝等が分相應、身が主ゑい釣合ぬ誠山本勘助があがむる主人い忝くも、足利十三代の公達松壽君、是へ透ひ申されゑと、詞の下ゑ高坂が、妻の唐織次郎吉を傳申せば、山城親子、ハアはつと計飛ゑ、さり、恐れ入たる計なり、眞中ゑどつかと直り、ヤア山城、只今打たる此手裏劍い、先年室町の館ゑて此公達のゐ母賤の方を奪ひ取立退折から、景勝目充ゑ打かけたる我小柄、只今我手へ慥ゑ落手、山本の苗氏を引與さんと軍學ゑ心をこらす所ゑ、武田信玄大僧正姿をやつし只一人密ゑ庵へ來らせ給ひ、足利の行末覺束なし汝我力と成て事を謀れと、名將の一言心魂ゑ徹し、ハアと畏奉ると、即座の領掌弓矢の誓テ、其時ゑ此母も只人ならずと思ふたが、扨い武田信玄公と、主從の契約仕やつたの、テ、サ大魚い小

池ゝ住ず鶴ゝ枯木ゝ巣をくゝず、智勇兼備の大將ゝ頼まれヤせし身の面目、直樣都ゝ馳登親ふ時しも館の騒動義晴公ゝわへなきに最期ハッァ詮方なし、懐胎の賤の方人手ゝゝ渡さじと、忍び入てに家の、白籏諸共守奉り、立のく館ゝ八方ゝ挑燈松明ちる花の、都を跡ゝ遠近の雪の信濃路爰かして、月の更科の片山里ゝ、人ゝらずかくもふとゝ、さしもの母もに存知有まい、ゝらなんだ〳〵コレ〳〵そふしてに母賤の方の在所ゝ何國、ヤ、ゝどふゝやゝ〳〵、ハァヤも便なき事ながら、うき事つもる產後の腦はかなく此世を去給ふ、跡ゝ殘りしあの公達勿體なくも我子と僞り、次郎吉よ〳〵と、呼度〳〵の空恐ろしさ口惜さ、弟嫁が乳を幸、我子を捨させ、他家のあの子を養育さする我心底、我儘無法ゝ一物有と悟し老母雪の中の筍を掘て見よとゝ、天晴明察實掛助が母人ぞや、穢れを厭ひ今日迄埋置たる雪中の筍是ゝ有と、箱追取て差上る源家正統武將の白籏、神明を頭ゝ載く

義兵の旗上、謙信親子只今ゝ此勘助が幕下ゝ付と、立歸つていひ聞せゝと、一つの眼ゝ天が下見下す富士の山本勘助三國無双の弓取也、山城大きゝ感じ入、信玄景勝不和成も、互ゝ心を疑ひあふ、忠臣割符を合すがごとし、君には在家ゝるゝ上ゝ景勝公の云譯立て、身がゝりゝも、もふ及ばぬ、追付兩家和睦の基、成程〳〵、最前裏で直〻ゝ樣子を聞た、信玄公と勘助樣、いひ合せの有事ゝ、一家中へもお隱し有ば、夫高坂も露ゝらず、抱ゝ來た慈悲藏殿ゝ、思ひも寄ぬ長尾の家來、君のは事初めて聞た使の面目、此上なしと悅びの中ゝ歎ゝ一人の孫から心がとけるなら仕樣模樣も有ふ物、此ばゞが偏屈から、信玄方の恩受てゝ立ぬといふた一ごんで、直江が手ゝかけ殺ゝやつたゝ、則母が殺した同前、コレ〳〵嫁女赦してゞ、勿體ないちぶさゝ離て死命、思ゝずゝらずお主樣の、お益ゝ立たも因緣と泣ぬ顏するいぢらしさ、母ゝ一間の一卷携へ、不孝と見へし勘助ゝ却て父

の名を上る廿四孝よ優りし孝、器量も揃ふ二人の子供、軍法傳授の此一卷、頂戴しやと差置ぺ、謝助取て押戴き、父の苗氏を給いれぺ、謝助が身の規摸ハ立、母方の氏をつぐ弟直江が母への孝、其德よよつて此一卷ハ、其方よ下さるゝは恩を忘ず、猶此上、孝行怠る事なかれ、景勝の忠臣い我朋中よ徹したれ共、心得がたきハ親謙信、君よ弓引逆心ならぺ、汝も從ふ心やいかよ、いふよや及ぶ、我子を切て二君よ仕へぬ此山城、兄といいハさぬ敵味方此三略の恩を仇、一合戰仕らん、さもあらん出かす〳〵、我又主君よ仕ふる甲斐の天目山よ楯籠出合所ハ川中嶋、運よ乘じて越後の出城諏訪の城迄押寄〳〵、さも目ざましき勝負をせん、潔し去ながら、仮よも一旦景勝よ、請たる恩ハ何と〳〵、日月よたとへたる右の眼い越後へ進上、二心なき勇士のかため、母よあたへしかたしの下駄、景勝の志捨るハ武士の道ならず、と、左の足よ去つかとはきおり立、庭の高ひ

くも道いゆがまぬ弓取の直なる竹の根もとゞはつしと切たる簇竿い、聖運目出たき大將の、さそふい賢きは笑顔眼る花の、死顔よ抱てゆぶつてすかしても、返らぬ昔唐士の廿四孝を目のあたり孟宗竹の筍い、雪ときへ行胸の中氷の上の魚を取それい王祥、是い他生の縁と縁黄金の釜より逢がたき、其子寶を、切離す弟が慈悲のどうよくと、兄が不孝の孝行い我日の本よ一人の勇士、今よ、名高き山本氏、武田の家の礎と事跡を、世ゝよ殘しける

○第四　道行似合の女夫丸

僞りの、文字をわくれば、人の爲身の爲ならず戀ならず、心なけれど濡衣がなきつまの名も、勝頼よともなふ人も、勝頼といふてよし有簑作が、ちらしくばりて藥賣、けふ立出る此國も、かいしよ有げな、女子の去よてい、きどくぼうしよ、筒きやはん跡よつゞいてくすり荷をかつぐひぢ笠袖

笠の、匂ひぬ花のふりつもる、去なの路、さして行道の泊り〳〵や、宿〳〵へ商ふ物ハ草の種命の種の生藥、詞よつやを濡衣が、そも此藥ハみちのく南部よかぐれなき、新羅の家の名方、萬の病よ用てよし夫藥一粒ハ、たとへ千金万金よもかへ難き其我夫ハ、世をさりて、いつの世よかハ、木曾の流れの、山川よ、女涙男涙が扨浦山し、夫婦ならねど、つい云事もかた田舍情がましい一言ハいハしど岩間の細道を、あゆみ馴たるはぎの雪夫ハめいどよ我身ハ爰よ、櫻花かやちり、〳〵よ、花かや櫻、さくら、花かやちりぢりよちりよまじハる神心、伏拜行うてなが原、道行人も指ざして、あやかり物とあだ口よ浮名立るもア、はづかしや、今の我身ハ、中〳〵よ戀も、情もあれはてし、青柳過て宮田の町、とかく、浮世ハ、伊勢の濱おぎ難波の蘆とかハれ共かハらぬ、物ハ夫の名と、おまへもいハ、ど勝頼樣、いつの世よかハあい染川の、身の浮ゑづみ七度ハ、氷を渡る信濃路へ、急ぎ行のが、第

一丸、此は藥も養作も、もとが新羅の流よてかれよし是よし世の中もよしと浮世を渡る川、心よごさず墨染の、此身の末ハ天の川、空よも戀があれゞてそ、雲よ浮名ハ七夕のいとくりかへしかへしつゝ、戀の染衣濡衣がむかしを忍ぶはやりうた、くるか〳〵と川下を見れゞ川原やなぎの、かげばかりさりとハかげばかり、川原柳のかげばかり君を待、忍び〳〵よつま戸へ來れゞ、月の影さへ、氣よかゝるさりとハ氣よかゝる、月のかげさへ氣よかゝるゞ、逢たやな、とふも語るも、いく難所、野てへ里てへ山てへて爰の一村かしての宿の、軒つゞき藥〳〵と賣聲もやさし、去ほらし立ならぶ家居よ今宵一やどりと暫く、勞を、はらしける、のふおそろしや〳〵、これい咄しでちりけ元から身の毛がよだつ燈心一筋へすべいと、相州北條氏時の和田の別所、村上左衛門預りてけふ留守番の中間小者、百物語も親方の油ねぶりと去られける、サア〳〵今度ハ術内が咄番だ、又

おらが、燈心も餘程へりうそぐらふ成て隅〻が見らるゝ、信玄の領分天目山と國並の此信濃なれバ、化物が出べい、わいらもゝレ鍔元くつろげておれさ、チ、此寒六も冬平も油斷ハせない、若女の化物が出たら、だん平物で打切より打切買たと思ふて、かつゑてゐるだん平物ゝ足能さそ、サア〻術内咄しせろさ、チ、サ〻昔甲斐國ゝ幣氣深い女が有て、男の心のかハつたを恨、夜な〻男の門ゝ行、聲打ふるハして、のふ悔や、妬しや、云かハしたを忘ハせじ、今こそ思ひ知らすべいと、戸を蹴破り男の咽へくらひ付生ながら鬼ゝ成たと京大坂の芝屋で、甲斐國の女の鬼と、狂言に知たげな。夫から其家が毎夜さ家鳴、是ハ餘程こハい咄だ、聲ふるハせずと咄せろさ、コリヤ寒六其樣ゝおらがねきへ寄なやい、イヤサわれが身どもをおす知やないか、シテ其後ハどうか〻、夫から二階がめき〻、うら、せどがぐはた〻〻、アレどろ〻と家鳴がするハ、百物語のふしぎかと、赤鰯のそり

打廻し、もづそをきらずでくふごとく壁を睨で尻込みする其中よどん〳〵と間近く聞ゆる太皷の音待〳〵あれゝお旦那村上様和田山で獸狩のせて太皷ソレ〳〵近ふ聞へるから、お歸りよ間も有まい、こゝら片付掃除去て化物ゞ醜い、旦那のお目玉貰ふなと、皆部やゝ〳〵よ入よける、見渡せば野も山も皆白妙の和田の山、雪の下伏兎狸猪狐を狩取んと、村上左衛門義清狩裝束花〳〵敷、山案内の狩人召連得物をせてよ指荷ゝせ、和田の別所に立歸り、門開かせて村上左衛門、悠〳〵と打通り、雨冷る〳〵、世上の譬へよ違ゝず、犬骨折てたかの、知た得物、北條殿の此下屋敷を預る某、今日の猪狩も私の遊興でない、諏訪明神の神使ゝ年ふる白狐、信玄是を信仰去て武運を祈ると傳へ聞何とぞ此狐を狩とらんと思へ共、神通得たる白狐よて狩人の手よ及ぶまじ、去よよつて一國の野狐を殘らず狩取ふば、神通得ても遺ゝ畜生、万一白狐を射留たらば莫太の褒美、其旨急度心

得よとさも押柄よ云渡す、近習の侍飯山郡太おれば、せよ立歸り、某せ
この殿を仕らんと、引さがりし所よ、高嶋の坂中よて年ふる女男の狐を
見出し、弓よ矢をはげ追かけしよ、小笹が隈よ逃入てかいくれよ行方知
ず、無念千万仕損せしと、薄かや原かき分て搜せしよ、狐よ勝ぢし女の曲
者生捕て參上致す、ナニ女を生捕たとい、必定敵方の紛者幸新身の刀試胴
切よしてくれん、是へ引と詞の下、引立出る、さを鹿の是もつま乞女と見
へ、都育のぼつとり風、女好の左衛門大口くいつとよく見れば、戀こがれ
たる妹八つ橋、其儘抱付たい所、家來の手前と仁體作り、郡太いしくも
ゑたりな、コリヤ女近ふ寄て身が顏を見い、ナコレ村上ゑやゝ、おれを慕て遙よ、
の所をよふおゑやつたのふと、いふ所なれど爰い主人の下屋敷、アレ多く
の家來共がナ合點かコリヤ者共此女今夜身が寢間よ引すへ、新身のだんびら
物を以て、臍の下を試見ん、寢所よ土壇の用意急げやつと、片頰よ皺面片

頬よ細目、詞うぬらい何ゑておる、早くうせふ己もうせいと呵付、邪魔を、
拂ふて、詞コレ戀人、そもじの事を明くれよ、うつら、〳〵と戀こがれ、詞待よ待た
念が届て、今日爰へおゑやつたい是偏よ諏訪明神の引合、けふから身が
奥、但いいやか、サ、〳〵どふゑや〳〵と云なだれかゝり抱付ばふり放し、詞私
いお主のお行衛を尋吟ひ、是方東の方を心ざして行ねばならず、お志い
有がたけれど、今いかへして給いれと涙ぐめば、詞そゝやならぬ、云事聞ね
ば百増倍で仇する左衛門、夫でもいやか、何と〳〵といへど答も泣入八
つ橋、詞、ゑふとい女め、コリヤ〳〵家來共、此女眞裸よして氷せめ、八寒地獄の苦
しみさせい責よ〳〵と高聲よ、八つ橋庭よ消入心地、折もこそ有取次の
侍罷出、詞甲斐の國武田信玄の使者高坂彈正、越後國長尾謙信の使者越名
彈正、通し申さんやと伺へば、村上驚き、長尾い格別武田とい鉾先を爭
ふ中、其兩家の使者一所よ來たとい心得ず、何よ逢せよ對面せずばおく

せるよ似たり、逃走せぬ樣よ其女よゝ繩ぶつて庭の樹木よくゝし上ひ、敵國の使者なれば手だれの武士共次の間よ、ぬかるなやつと云渡し、其身も衣服改めて悠ゝとして座しゐたる、程なく入來る高坂彈正越名彈正、刃を爭ふ使者と使者、物をも云ず辭義もせず、見ても見ぬふり上下のひだと、〳〵もすれ合中、兩人刀拔置て、遙下つて高坂彈正、口上の趣といゝんとするを先待高坂、此越名よ宏ぎもせず、使者の口上ァなるまい、よゝなせよ、門前へ乘込も一時、玄關へ上るも一時、身が口上ヤ上る迄、すつ込で居よ逃彈正ェ、此高坂逃たか逃ぬか只今勝負ェ、合點と刀追取、袴のそば取、サァ〳〵勝負と立向へば、村上大口明てから〳〵と打笑ひ、主の使者よ立ながら、儕等が威勢を爭ひ、身をはたす侘武士、身よ對してゝ不禮と云ふか慮外者、察する所長尾ゝ先達て北條よ心を寄る氣、武田も俱よ氏時の味方と成、此村上共和睦して、謙信ゝ信玄を亡し信玄ゝ又謙信を亡

さんとの頼の使者、違ハせじと村上よ星をさゝれて詞を揃へ、賢察の通、ばみかた願ひ奉る頼の使者、お受なされ下さらば、我〻迄も大慶と恐入て述ければ、ホヽウ我眼力違ハざりしな、兩家の頼聞入ぬも武士の本意ならず、兩家の返答依怙なき樣よ武勇闘、弓矢打物の勝負よて、勝たる方へ北條村上倶よ味方、幸是よ山狩の弓矢二手、氷をつみ上わづちとして、一寸二寸の的ハ勝負遲し五尺の的を射させんず、ナヲ〻郡太、其去ぶとい女めこそ偏僵の的、胴腹を射通させ難面心よ思ひしらせよ、女め引と云間もなく、縄目血走る細腕、涙ながらよ八つ橋も、なく〻引れ立出る、あれ見よ兩人、此女ハ足利家の賤の方の妹八つ橋、我都よて見初折がな時がなと思ひし所よ、今日思はずも此村上が手よ入共難面女、我が詞を背故、汝等が勝負よて彼めを成敗我見る前で胴腹を射通せと、刀を杖よつゝ立上り眼をくばれば高坂越名いかゞハせんと眼ふよゞ、猶豫すれば味

あわせぬ、いかよ〳〵と聲あらしやれば兩彈正、辭するよ及ば丈、弓矢手
練、不便よい思へ共國の爲にいかへがたし、心よ得と觀念せよ、サア〳〵高坂
勝負ぬかるな、心得たりと諸共よ、弓と矢つがひきり〳〵と引ぞぼり、
弓手め手へ身をひらき、切て放す目充い村上、射かくる矢先兩手よ玄つ
かと、ハテ、、察する所謙信信玄心を合せ、和睦を云立、此村上を討取んといい
ふ、ろか〳〵、所存も知ざる儕等よ、弓矢を渡す左衛門が大肝よ、己等が矢
先が立べきか、ヤア家來共女を引立、きやつばらを搦捕と、聲の中よりせこ
の者ばら〳〵と追取まく、ハテ、欺寄て討取んと計しよ仕損じて高坂、ヤ、越
名無念〳〵よ、腮擲すなと取付やつばら、右と左へ蹈すへけすへ、一度よ
かしれば信玄流、謙信流の太刀打早業、手を碎たる働よ、家來もせこるた
まり兼むら〳〵ぱつと逃入ば、めざすは村上遁さじと、双方ゟ切かくる
を、引はづし〳〵重て切込刃と刃、ヤ、合點と身をかいし、傍なる火鉢で玄

つかとおさへ、ひかん〳〵ともがく二人が首筋掴ぐつと引寄せめ付られ、無念〳〵ともがけ共、膝をかためてびつく共動さず、傍等此村上を欺討を討んとせし其返報を踏殺さふか、但い掴殺さふか、どうせたら腹がいよ〳〵夫よ、當の矢を射返さん、肝のたばねを受取と尖矢二本逆手を取、喉ぐつと一ゑぐり、ゑぐりゑぐられ高坂越名、七顛八倒五體をもがき、あへなき最期ぞせひもなき、女めいづくをゐる、早く〳〵と呼れておづ〳〵八つ橋が氣も魂も身を添ず、此体見るかはつと計袂を顔を押當、そゞろを震ふ、計なり、八つ橋おれを敵たぶやつ原が、此死ざまをよつく見たかと尖矢引拔どふと蹴飛し、女もおれが詞を背くとまつ此通いやでも應でも抱て寐る寢所へこいと引立行、奥い俄を家鳴震動、庭の植込さい〳〵と風、をあをつて蠟燭の、火かげを見れば燭臺を目鼻あり〳〵朝貌のあしたを咲て夕部をゐ、露の命も戀故ならば、儘よてんぽの皮巾

着さんごの珠の目をひからし、腰よもつれて寄添ひ、村上ぎよつとし、何ぞや、ツツ聞へたけふ山狩の狐狸、我よ仇するよつくい四つ足、目よ物見せんと燭臺けとばし、こなたへ來る樣がいよ、又よよつぽつりと石燈籠火袋よ顏まざ〳〵と、有明の月の眉、目元よ色を夜目遠目、笠よ苦むす手水鉢、やらじとと〻むる檜杓の手、跡へ戻れば青天井がくるり、くる〳〵蛇の目むき出すろくろ口、ひらいてすぼめて、相合がさの袖と袖、雨や雪霜ふらばふれ〳〵、ぬらしいせじと、一本の足手まどひとなりひさご瓢簞から駒下駄も庭の飛石ぐいた〳〵、待合の半鐘のうなり、くいん〳〵鑵子、刀掛地の角軸も、三幅對の竹よ虎うそふけば風おこり、龍吟ずれば雲おこり、炭のおこつた大火鉢、目鼻をかめて這寄ば、戸障子襖ぐいた〳〵、道の村上氣を奪いれ、女を小脇よ引だかへ行共行れず、戻れど戻さぬ妖怪よ、刀を拔て切廻れど只霧霧を、切ごとく、腕もなまり五體

も、ゑびれ眼くらんでよろ〳〵とどうと伏たる村上が形計い有〳〵と、玄關廣間大座敷書院床の間おなりの間有つる女も消失て、舘と見へしい信濃路の、雪ふりつもる和田の山ふゞき計や、殘るらん、かやせ〳〵迷子の殿樣かやせ、かへせ〳〵と高挑燈よ太鼓鐘舛の麁忽な大名の殿樣かやせと大勢が尋吟ふ向ふ方、名いさつさ〳〵夜道を急ぐ早飛脚、コリヤ〳〵飛脚物問べい、只今われがくる道で、殿樣らしい迷子よい逢なんだか、イヱ〳〵殿樣らしいい扨置夜の殿よも逢しませぬ、ウヅ夫ならば金作りの刀脇指で、心中なゞゑてゞいないか、水よはまつて若死いなされぬか、イヤそんな事い見當らぬ、迷子の子か大名なら火よくゞらゑやろも知ますまい、ヤア早飛脚が何かといふ間よ遲飛脚隨分尋さゑやませと、道を早めて走行、家中の者共力を落し、ア、ふいとしや〳〵、大方狐の業であろ、今頃いてつきりと、お召がへの雲雀毛がむさい物を小豆餅ゑやと恩召て、ひつたも

のあがるであろ、イヤ案じて居ても事が濟ぬ、うさんなん此かや原捜て見よふと足輕共、そこよ爰よと雪かき分る萱の影、人こそ有と挑燈てん手よ見れば見る程紛もなき迷子の殿樣ヤ〳〵迷子の子の殿樣いなふと、聲よ氣の付村上左衛門むつくと起たる其形ん莚袴よ竹大小反打廻して大音上、夫へ來るん武田信玄、かくいふん信濃の住人村上左衛門義清が留たやらぬと呼んつたり、ヤ〳〵、私ん方お草履取のばけ介でござります、ヲウばけか、信玄でんない玄や迄、あれ〳〵、比興未練の越後の謙信、遁さじやらじと、追をとゞむるけらい共、正體なき旦那の有樣、人の見る目も恥給へと、抱とむれば漸と狂ひ、伏てゐたりしが、村上漸心付、やあらふしぎや、今迄和田の館の内、越名高坂を指殺し、我ながらついよ覺ぬ勇力と思ひしが、爰へんァどふしてきた、サアきのふの山狩から迷子にふ成なされ一家中が一遍三界、皆麓迄お迎ひよ參つております、ムそん

ならおれが強かつたのゝ、狐の業か、成程かのでござりまず、かのとゝ誰ぞや、八つ橋が、やれ〳〵戀し床しとこがれた戀人手よ手を取て歸ろやれ、足元を爪立ちよこ〳〵〳〵とつま立て、行んとするを、家來共よつてかゝつて乘物よ助乘れゞ步若黨、乘物參れよはい〳〵〳〵、尋逢たる太鼓鐘はやし立〳〵、迷子の殿樣取返したかへしたゝ〳〵、お先手をふる迷子の子、逢てめでたき信濃路の薄萱原ふみ、分ていのふやれ我古鄕へ、「立歸る、信濃なる諏訪の湖要害よ楯籠たる館城、長尾入道謙信ゝ、代ゝ越後の城主として、己が武勇の鉾先よ爰も切取諏訪の城、新よ立る奥ゝ殿ゝ義晴公のゝ幼君後室手弱女ゝ前、俱よお成を設の結搆、大方ならず見へよけり、けふぞ其日と姥婢闘し中よ立集り、何と皆の衆、去年からのゝ普請で結搆よ建た奥ゝ殿ゝ、武將樣とやらの後室樣のお成ぞやげな、わしらゝそんな事とゝ云ら、此館のお姫樣八重垣樣のゝ祝言、其拵へかと

思ふてゐた、チ、あの人のいやる事ゝい、八重垣様よゝ云號の有た勝頼様ゝ、去年の秋に切腹それで其勝頼様の姿を繪よゝ寫しゝ姫様が明ても暮ても泣て計ござるが、そなたの目よゝかゝらぬか、けふの拵へゝ今日本の大將軍のゝ子様なり、其後室様尋常のゝ客とゝ違ふ、夫で此間ゝ國〻の名物をゝ求なさるれど、今此諏訪の湖よゝ氷が張詰、舟の往來も叶ゝぬ故、何かゞきつい手づかへと、役人衆の心遣ひ、夫程晴なゝ客様故、念よゝ念を入て不調法のない様よとの云付、新參とゝ云ながら物馴た濡衣殿、何かの事を頼ぞや、ホ、是ゝ又人を術ながらす様よゝ物馴たやら馴んやら、今參りの私に前方よゝ引廻して貰ゝよやならぬと、傍輩中のゝおれそれも、中能見ゆる中庭ゝいきせき出る簑作が今ゝ姿も菊作り、花恥しき角額様先よゝ小腰をかゞめ、奥庭の花檀の菊、かゞむを伸し延るをちゞめ、枯葉一枚ない様よゝ殘らず手入仕り、漸只今相仕廻ふと、いふ顔うつとり姥中、扨

も見事よい男、こんな男よ手入えらるゝ菊の花いあやかり物、わしらもどふゞあの人の手入で小菊が咲したいと、何がな悪口言捨よ奥へ行跡幸と傍見廻し、濡衣が庭よおり立手をつかへ、あなたよお別れヤてより此館へ入込わたし程ふる日數の明暮もどふお暮し遊バすぞと、案じる中よ思ひも寄ず、菊作と成て此館へ、お出なされし勝頼樣、ハ思案でも有ての事か、ホ、不審尤、此家の主長尾謙信、一子景勝を討ても出さず剰義晴公の忘筐松壽君、ハ毎公諸共けふ此館へ招く段、心得がたく思ひし故、菊作と成て入込某、汝が役目い法性の兜、いまだ奪取便もなきや、濡衣いかゞと有けれバ、ホ、其兜の事故よ奉公よ出た私、微塵も油斷い致さねど何をいふても用心嚴しく夫故心よ任さねど、お悦び遊バしませ、今日の躰と有て、其兜を上段よ餝してゆへバ、けふを過さずお手よ入んすりや其兜が奥の間よ、お聲が高いと指寄て咄き默く二人が相談、夫と白洲へ

立出る、姿一くせ有親仁、娘〳〵コリヤ娘と、呼れて恟り飛、退濡衣、ヒ、と〳〵樣と云た事が、あの人ゑ花壇の事をいひ付て居る所を、斷なしゑ娘〳〵と呼樣な、あたぶ躾な不遠慮な、何ゑや斷なしゑ娘と呼だがぶ躾ゑや、こりやおれが惡かつたゝい、今度から用が有て呼なら、サア娘今呼ぶぞと先へ斷ろ〳〵〳〵、こゝや前髪、わりや花作る事が上手ゑやといふて、昨日から雇ゝれて來てゐるが、此花畑ゝ此關兵衛が預り、けふのお成のお饗ゑ成花故取分て大事と思ひ、助ゑ雇た花作り、るふお成ゑ間ゝないが、草計かゝいておつて、夫で仕業が出來るかよと、呵れて手をもぢ〳〵、詞イヤモ外の花作ると違ふて、不斷手入のゑて有花壇故、何ゑも仕事ゝでざりませず、漸と枯葉を取たり、花形のふりを直すがせいさい、夫故仕事も思ゝぬはかいき、落葉一枚ない樣ゑ掃除迄仕廻ましてでざります、〻、夫なれゞ精が出た、花壇が濟だら外ゑ用なし、次へいて休息せいと、赦す詞ゑ蓑作が勝手へこそゝ

立て行、扨拔見かけよ似合ぬ精出すやつ、兎角人ゝかげ日向が大事の物、ゴリヤ娘、われも隨分精出して仕奉公よ私すなと、いふも眞身の親子の中、扨、と〻樣の添いお詞、稚い時ゟ武田の家よ官、不慮の事故親里へ戻つて見れば、扨、と〻樣も今でゝ長尾の此家へ仕奉公を幸よ、親子一所よ官、新參者でも侮れず、傍輩衆よも憎れぬゝお主の仕恩と〻樣のかげ、仇疎よゝ存ませぬ、扨、そふ思へば冥加がよい、此親も仕領分よ狩人を商賣よ、かつかつよ暮した身分、謙信公の見出しよ預りお館よ置るゝゝ、此屋鋪よ有諏訪法性の兜とやらゝ、諏訪明神ゟ給ゝつて、則神のつかゝしめ、狐が寄て番をするふしぎの兜、そこで又野狐共が其兜を戴ば、官上りするとやらで折〻館を徘徊する見付次第打殺せと、アレ座敷先よ小家を乞つらひ、狐の番が役なれ共、勇氣盛な謙信公何の狐が來ふ筈もなし、安閑としてゐる隙よ仕覺た花畑時ならぬ菊を作るがお氣よ入て狐の事ゝ餘所よ成、

今でゝ菊の花守親仁、樂〻暮すも主人のかげと、互の身の上をみ〳〵と親子咄の折からよ、早ゝ成と騒立奥へ行人戻る人、心闘兵衛濡衣も奥と口とへ別れ行、館の主長尾謙信、衣冠正しき儲の式禮、角立中よさとかはる音もをと〳〵女中の手がき邊輝鉄乘物見る方謙信謹で、優曇花とやいゝん奇代のゝ入來、冥加よ餘る身の面目、直よ其儘奥ゝ殿へと、差圖よ隨ひ乘物ゝ、奥へ行跡謙信も、續て入んとする所へ、暫く待た長尾謙信、奥方方のゝ上意有と呼ゝる聲、はつと平伏頭を垂、待間程なく立派の骨柄長袴の裾けはらし、上座よどつかと異儀を正し、先以今日ゝゝ幼君松壽君、ゝ母公共よ入來の面目恐悦よ思ゝるべし、去よよつて母君方、貴殿へのゝ上意餘の義よあらず、先達て中渡せし子息景勝の首今よおいて討ても出さず、事延引よせらるゝ段必定野心よ極れゞゝ前よおいて切腹を遂らるゝや但景勝の首只今討て出さるゝや、返答次第計らふ旨有、謙

信いかゞと上使の權柄、こゝ思ひ寄ざるに上意と、顔ふり上て、汝ゝ躬景勝と驚く謙信さあらぬ上使、景勝よもせよ誰よもせよ、一旦躬を討べしと契約有しゝ諸大名の眞中、今よおいて其沙汰なく、剩本國よ引籠、底の知ざる親人の所存、謙信の心底と人の疑立ヤ、なぜさつぱりと我等が首、躬景勝の首討て心底ゝ見せられぬ、首討か但ゝいやか、有無の返答承ゝらん、何と〻詰寄ば、遁名を得し謙信も、躬を悴が討手の上使返答何と當惑の口をつぐんで見へよけり、未練の心底此上ゝ其爰よて切腹と指添よ手をかくれば、暫く、必早まり給ふなと、聲をかけて花守關兵衛、何か白洲へ白菊の花携て立出れば、汝等ごときが知事ならず、去されやつと景勝の怒よちつ共臆せぬ關兵衛、下として上の事、指出るでゝござりませねど、最前ゝあれよて樣子承ゝれば、どふやらかうみゝら取が、みゝらよ成樣なに上使樣、わつたらしき侍の首切て仕

廻ゞ、再び生らぬ、又此花ハ何ぼ切ても生らるゝナ切て生すといふ傳授お望ならゞ指上たいと、どこやら詞の一理屈、聞て謙信眉を去いめ、切て生るゝと云白菊面白し〳〵、關兵衛其花所望せん、成程花ハ上ませふが、花計でハ自由ゝ生らぬ、夫を生すハ花作り、幸お次ゝおりますれゞ、是へ呼寄俱ゝゝ、生る傳授をハ覽有、花作の簑作ハ用が有、早ふ〳〵と親仁が呼聲菊作、けたゝましい何事と、此塲の樣子白洲の内、いきせき出る顏形汝ハ武田勝頼といふをとゞめて、ヤ〳〵夫おつしやると物がない、何ゝも去らぬ白菊の花、其生樣をゝふ覺た此花作、人のふり見て我ふり直すが第一の傳授事、是さへハ所望なされゞ何もかもさつぱりとヤ譯の立そふな物と、憚ながら親仁めハ存まするゝと、簑作が身の上夫と白砂ゝ、額摺付踞る、迚の花作、今ハ舘ゝ召抱んが、わりや謙信ゝ奉公し花の生樣傳授せんや、ハイ成程外の事なら存ませねど、花一件なら生さふと殺

そふと我等が得物、夫を屑よ抱なされて下されふなら、望で成とは奉公仕度御屋敷、出かしたういやつ、は上使へのは返答ヤ上るゝあの裟作、先夫迄ゝ暫しのは猶豫、偏よ頼存ると、餘儀なき頼よ打默き、過急のは上意用捨ゝならねど、鹽尻峠よ扣へ居る諸大名へヤ渡す子細有ば、我ゝかしこへ立越ん、有無の返事ゝ鹽尻迄、隙どらば直よ此城取圍ん追付有無のは返答、認る中花作も次へ參つて衣服大小、ハテ有がたし〳〵と、勇裟作景勝ゝよがり切たる鹽尻へ別れて、こそゝ出て行跡見送りて關兵衛ゝ、謙信の前よ手をつかへ、花作の裟作合點が行ぬと存せしが、あれが大方、紛もなき武田勝頼、夫と見出せし花守關兵衛、下郎よ似合ぬ中〻器量の有親仁、其性根を見込改て謙信が、頼入度子細有我よ頼れ得させんや、返答聞んと有ければ、是ゝ又改たお詞、元狩人の私、お見出しよ預かつた君の大恩譬命のは用でも、いやとゝヤさぬ我等が魂、頼もし〳〵、其

詞を聞上ん、何をか包まん是見よと、去づ〳〵立て一間の障子開けば内よ怪しき牢輿、關兵衛ふしぎと指覗、牢の内よん科人らしき者も見へず、何やら見馴ぬかゝつた物、そりやア何でござりますと、尋よ謙信異儀繕ひ、未日本へ渡らざれば、汝等が知ぬん理是こそ鉄炮と名付し飛道具、ムヽ、其又鉄炮とやらが盗でも致せしか、何の爲よ此牢へ、ホヽ、科ん天下を望叛逆、さいつ頃武將の御前へ、薩州種が島の涙人、井ノ上新左衛門と名乗、此鉄炮を献上し、類なき軍器の重寶遣ひ樣の傳授せんと、欺寄て義晴公を一打よ、跡をくらまし其塲を逐電、草をわかつて尋搜せど、今よ行方知ざる曲者、詮義の手筋ん此鉄炮、其所よ殘り有しが則科人同前なれば、此とく禁牢させ、日毎の拷問手を盡せど、義晴公を打たる敵今日迄白狀せざる不敵の鉄炮、只今ゟ此詮議、汝よ申付る間、火水を以て責さいなみ、敵の有家を白狀させよと、鉄炮くゝりと投やれば、手よ取上て軻顔、すりや私

よむ頼有り、此鉄炮とやらを貴いでござりますか、是い又思ひも寄ぬ拷問も問狀もなみ〳〵の人間なら、及ばずながら責も致そふ、きせるやの看板か、唐の火吹竹見る樣な物、責いとゐは難題、あなた方の手よさへ合ぬ物、其上何を證據手がゝりもなし、手がゝり證據い其鉄炮の遣ひ樣普世上よ知者なし、其傳授を覺し者こそ、すりや何とは意なされます、此鉄炮の遣ひ樣を覺た者が、則武將を打たる敵、スリヤどふでも詮議を私よ、仕損ずまじき汝が魂、此親仁が性根魂を、見込で頼よ違背い有まじ、油斷致すな關兵衛と、詞も重き大將の心殘して入給ふ、ヤ〳〵、我等風情よこんな役目、難題も事よる、外へ仰付られいと、跡を詠て、未日本へ渡らぬ鉄炮、遣樣を覺へし者が、義晴を打たる敵、此關兵衛よ詮議せよとい、合點の行ぬ謙信と、諸手を組で工夫の顏色、いや〳〵、どふ思案して見ても、我等よい似合ぬ役目、やつぱり似合た花の番、鳥おどしの弓矢

ゐ、外より何よりも白髪の親仁、小家へいて一休と、ふりかたげたる鉄鉋も、胸よ一物有明の月もる、臥所へ行水の流と人の、鍛作が姿見かいす長上下、悠ゝとして一間を立出、我民間よ育人よ面を見えられぬを幸よ、花作と成て入込しい、幼君の此身の上に、若過やあらんかと餘所ながら守護する某夫と悟つて抱しや、ハテ合點の行ぬと指熟思案よふさがる一間よい館の娘八重垣姫、云號有勝頼の切腹有し其日ゐ一間所よ引籠、床よ給姿かけまくも此經どく岩ゆのとんの音、てなたも同し松虫の鳴音よ袖も濡衣が、けふ命日を、弔ひの位牌よ、向ひ手を合せ、廣い世界よ誰有てお前の忌日命日を、弔人も情なや、父此の悪事も露えらず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいとしい、嘸や未來い迷ふてござらふ、女房の濡衣が心計りの此手向、千部万部のお經ぞと、思ふて成佛えて下さんせ、なむあみだ佛、〳〵、誠よけふい霜月廿日、我身がいりよ相果し勝頼が命

日、くれ行月日も一年餘り、なむ幽靈出離生死頓生ぼだい、ヤ勝頼樣、親と親との云號有し樣子を聞かも、嫁入する日を待兼て、お前の姿を繪よ書し、見れば見る程美しい、こんな厥ほと添臥の身い姫ごせの果報ぞと、月よも花よも樂しみい、繪像の傍で十種香の、煙も香花と成たるか、回向せふ迎ふ姿を繪よいかしこしいせぬ物を、魂かへす、反魂香、名畫の力も有ならばかいいとたつた一言の、お聲が聞たい〳〵と、繪像の傍よ身を打ふし泣淵、こがれ見へ給ふ、あの泣聲い八重垣姫よな、我名を呼し勝頼を、誠の夫と思ひ込、吊ふ姫と吊ふ濡衣、不便共いぢらし共いいん方なき二人が心とそゞろ涙よ、くれけるが、ヤ、我ながら不覺の涙と、袷かき合せ立上る後よ玄よんぼり濡衣が、ヤ簑作樣合點の行ぬいあなたのお姿どうした事で此樣よ、ヤ、不審尤はからずも謙信よ抱られたる衣服大小扨も衣紋付なら上下の召樣迄、似たとい愚やつぱり其儘筐こそ今い仇なれ

是なくば忘るゝ事も有なんと、讀しい別れを悲しむ歌、筐さへ玄やゐ我夫ゐみぢんかいらぬ此お姿、見るゐ付ても忘られぬ、わた玄や輪廻ゐ迷たそふな、に赦されて、に伏沈む、泣聲洩て、一間ゐいふしん立聞八重垣姫、そつと襖の透間もる姿見まがふ方もなく、我夫か勝頼樣と、飛立心を押玄づめ、正しうお果なされし物、似たと思ふい心の迷ひ、繪像の手前も耻しと立戻つて手を合せ、に經讀誦のりんの音、勝頼公い濡衣が心を察して聲くもり、はかなき女の心から、歎い理り去ながら、定なき世と諦よと、勇る詞こなたゐい心空成、其人の若やながらへおいすかと、思へば戀しくなつかしく又覗てい繪姿ゐ、見くらべる程生寫し似いせでやつぱりほんと、の、勝頼樣玄やないかいのと、思いず一間を走出すがり付て、泣給へば、はつと思へどさいらぬ風情、こい思ひよらざるに仰、我等簑作と申花作、漸只今召抱られ、衣服大小改し新參者、勝頼とい覺なし、に鹿相

右なと突放せば、何といやる、今父上よ抱られし新參者花作の簑作とや自と云た事が、餘りよふ似た面ざしの若や夫かと心の煩惱、二人の手前耻かしなが、ら、コレ濡衣、此簑作とやらいふ人を、そなたゝとをから近付か、エイいやいの、云る人で有ふがの、ナヽお姫樣と云た事が、たつた今見へたお人、何のアヲ私が、イヤ隱云やんな今のそぶり、忍ぶ戀路といふ樣なかゝいらしい中かいのと、思ひもよらぬ詞よ惚り、ヲヽ、お姫樣のおつ云やる事ゝいの、人よこそ寄、何のあなたよ勿体ない、ヽ勿体ないといやるからゝ、どふでもそなたの云るべの人かゝ、エそふでゝなけれ共、大事のお主の目を掠忍び男を拵へるゝ、勿体ないと申事でござります、ヽすりや知るべの人でなく、殿ばでもない人なら、どふぞ今から自を、かゝゆがつてたもる樣よ、押付ながら媒を賴ゝ濡衣樣〻と、夕日まばゆく顏よ袖、あてやかなりし其風情、ヲヽ、お姫樣と云た事が、まだお子達と思ひの外、大それたあの

義作殿を、サア見初たが戀路の始、後共云ず今爰で嫁せいとおつゝやるのか、我おれ、ほんよお大名のお娘に迎、油斷いならぬ戀の道、品よ寄たらお取持致しませふが、コレ〳〵濡衣、必麁相いふまいぞ、サア何もかも私が呑込で、呑込でお取持致すまい物でもないが、眞實底から義作殿よに執心でござりますかと、問れて猶も赤らむ顏、勤ずる身いいざゝらず、姫ごせのあられもない殿によ惚たといふ事がうそ僞りよいいれふか、其お詞よ違なくば、何ぞ慥な誓紙の證據、夫見た上でお媒、夫こそ心安い事、其誓紙さへ書たらば、イヤ〳〵夫もこつちよ望が有、わたくしが望誓紙といふい、諏訪法性のに兜、夫が盜で貰たい、サア何といやる、諏訪法性のに兜を盜出せといやるのい、扨いあなたが勝賴樣と、いふ口押へて、ハテめつそうな勝賴呼いり、みぢん覺のない義作、麁忽ばしの給ふなと、云顏つれ〳〵打守り、云号計よて、枕かいさぬ妹背中、お包有い無理ならねど、同じ羽色の鳥翅、人

目よ夫とわからねど親と呼又つま鳥と呼ん生有ならひぞや、いかよお顔が似れば迚、戀しと思ふ勝頼樣、そも見紛ふてあられふか世よも人よも忍ぶ成、に身の上といひながら、連添わたしよ何遠慮、ついから〳〵とお身の上明して、得心さしてたべ、夫も叶ぬ事ならば、いつそ殺てころしてと、すがり付たる恨泣、勝頼態聲あらゝげ、聞分なき戯事、いか程よ宣ふ共、覺なき身ん下主下郎、餘處の見るめも憚有、そこ退給へと突放せば、スリヤどの樣よ申ても、勝頼樣でんおんさぬか、ハテ、はつと計よ簑作が、指添逆手よ取給へば、こんに短慮ととゞむる濡衣、イヤ〳〵放して殺してたも、勝頼樣でもない人よ、戯言の恥しや、心の穢繪像へ云譯どふも生てん居られぬと、又取直すを猶も押留、遉ん武家のお姫樣、天晴成お志其お心を見るからん、勝頼樣よ逢せませう、シレそてよござる簑作樣が、に推量よ違は立、あれが誠の勝頼樣、ちやつとお逢なされませと、矣やられてん遉よ

も、始の恨百ぶ一聞へませぬが精一ぱい、跡い互ゑ抱付、つい、濡初ゑ濡衣も心どきつく折からゑ、父謙信の聲として、籤作いいづれゑおゐる、盥尻への返答時刻移ると立出れば、はつと籤作飛ゑさり、ば支度よくば直様參上、ホ、委細の事い此文箱ゑ、片時も早く罷越はつと領掌、文箱携へ、盥尻さして急行、謙信跡を見送つて、ヤア〳〵者共、用意よくば早來れと、仰ゑはつと白洲賀六郎原小文治更科なんどの譜代の郎等、ば前ゑ進み謙信いさんで、今此諏訪の湖ゑ氷閉れば渡海い叶い ず、鹽尻迄い陸路の切所油斷して不覺を取な、ハテ、畏奉ると勇進でかけり行、跡ゑ不審い八重垣姫、ア父、上と〳〵しい今の有樣、何事やらんと尋れば、ホ、あれこそい、武田勝頼討手の人數、何勝頼樣を討手とい、こいそもいかゑ何故ゑと、驚二人をはつたとねめ付、諏訪法性の兜を、盗出さんうぬらが工物かげゑて開たる故、勝頼ゑ使者を云付、歸りを待て討取さんと、ゑめし合せし討手の手配、そ

んなら今の討手の者ゝ、勝頼樣を殺さん爲か、ハテ、はつと計よどふと伏、けふゝいかなる事なれゞ、過去給ひし我夫よ、再び逢ゝ優曇花と悦んで居た物を、又も別れよ成事ゝ、何の因果ぞ情なや、父のお慈悲よお命を、どふぞ助て給はれとくどき、歎よ目もやらず、ヤア武田方の廻し者、憎き女と孺衣引立、うぬよゝ尋る子細有奥へうせふと小腕取、情用捨もあら氣の大將帳臺深く入給ふ、思ひよや、てがれてもゆる、のべの狐火さよふけて、狐火や、狐火のべの、のべの狐火さよふけて幾重洩くる爪音ゝ、君を儲の奥に殿、てなたゝ正體涙ながら、ハレあの奥の間で撿校が諷ふ唱歌も今身の上、おいとしいゝ勝頼樣、かゝる工の有ぞ共しらずはからぬお身の上、別れと成も難面父上、諫ても歎いても聞入もなき胴欲心、娘不便と思すなら、お命助て添せてたべと身を打ふして、歎しが、いや〳〵泣てゝ居られぬ所、追手の者ゞ先へ廻り、勝頼樣よ此事を、お去らせヤが近道の、諏訪の

湖舟人よ、渡り頼んと急がんと、小つま取る手もかい〳〵しくかけ出しが、イヤ〳〵今湖よ氷張詰、舟の往來も叶はぬ由、歩路を行てゝ女の足何と追手よ追付れふ、知らすよも去らされず、みす〳〵夫を見殺しよ、するゝいかなる身の因果、ゞ翅がほしい、羽がほしい、飛で行たい、去らせたい、逢たい見たいとつま乞の、千〻よ亂るゝ憂思ひ千年百年泣明し、涙よ命絶れば迦夫の爲よりよも成まじ、此上頼ゝ神佛と、床よ祭し法性の兜の前に手をつかへ、此に兜ゝ諏訪明神ゟ武田家へ、授給ゝるに寶なれば、取も直さず諏訪の神、勝頼樣の今のに難義、助給へ、救ひ給へと兜を取て押戴、押戴し俯の、若やゝ人の咎んと窺ひ、ふりる飛石傳ひ庭の溜の泉水よ、移る月影怪しき姿、はつと驚、飛退しが、今のゝ慥よ狐の姿、此泉水よ移りしゝ、ハテめんよふなとどきつく胸撫おろし〳〵、こゝ〳〵ながらそろ〳〵と、指覗く池水よ、移るゝ己が影計、たつた今此水よ、移つた影ゝ狐の姿、今又

見れば我保幻といふ物か、但迷ひの空目とやらか、あやしやとつ置つ兜をそつと手よ捧覗けば又も白狐の形ホよあり〳〵有明月、ふしぎよ胸もよごり江の、池の汀よすつくりと詠入て、立たりしが、誠や當國諏訪明神い、狐を以てつかいしめと聞つるが、明神の神躰、ヨ等しき兜なれば、八百八狐付添て、守護する奇瑞よ疑なし、ナ、夫よ思ひ出したり湖よ氷張詰れば、渡初する神の狐、其足跡を去るべよて、心安ふ行こふ人馬、狐渡らぬ其先よ、渡れば水よ溺とい、人も知たる諏訪の湖、たとへ狐い渡らず共、夫を思ふ念力よ、神の力の加いる兜、勝頼様よ返せと有、諏訪明神のは教へて、添なや有難やと、兜を取て頭よかつげば忽姿狐火の矣よもへ立、がしてよも、亂るゝ姿い法性の兜を守護するふしぎの有様、こなたの間よい手弱女は前、始終の様子窺ふ共、いざ白菊の花の番小屋よとつくと闘兵衛が、付廻しても神通力、花のまよ〳〵見へつ隠れつ神さる狐、なむ三

實とせき立關兵衛、ねらひの的い手弱女ゐ前、どつさり響鉄砲の音を相圖ゑ遠近ゞ俄ゑひゞく鐘太鼓、亂調ゑ打立れゞ騒ぬ關兵衛廣庭ゑ二王立、程なく馳來る雜兵原我討取んとひしめいたり、ゐゑゐらしき有財がき、此世の暇取さんと、だんびらずるりと拔放し、當る任せゑなぎ立く、ゐ殿をさして、行先の間ごと〳〵い、ゑん〳〵と灯火きへて音せぬい、敵の油斷折こそよけれ、ゑぼし素袍も忍び入、時の用ゑぞ大廣間咎る人も長廊下長袴の裾指足ゑ、ゐ座の間近く窺ふ關兵衛、あやしと兼て勝頼が。透せど見へぬ眞の闇、人こそ有と身を除れゞ、こなたも除るかなたの一間、立ふさがつたる三郎景勝、やり過してかけ入を、袖引ちぎれゞ手ゑさはる、下の腹卷曲者と、組付景勝小手返し、ひらりと付入勝頼を、さゑつたりと眞の當、たゞ〳〵〳〵と跡ゑさり、騒ぬ大膽ゑすまし顔、人を欺く坂東聲、大將のゐ座近く帶劍の武士叶ひ申さず、めい〳〵、詰所の當番太

切よ致されよと、そらさぬ體よ去づ〳〵と猶奥、深く行所を、〳〵美濃國の住人齋藤入道道三とゞまれやつと聲かけられ、肝よこたへてかけ戻り、邊をきつと大音聲、ひゞかしや、三十年來跡をくらまし、包隱せし我本名、齋藤道三と呼だるゝ、そも何やつぞ對面せんと、廣樣先よ枯木立景勝勝頼前後をかこひ、逃ゞ切んと詰かくる、後の襖さつと明、武田の忠臣山本勘助、叛逆人の詮議をとげんと、悠然と立出る、續て近習諸大名御殿廣間も燭臺よ一度よ輝灯の光、遁れん方てそなかりけれ、され共ちつ共隱せぬゑせ者、長尾謙信の此城へ、日頃不和なる武田の家臣、山本勘助とやらんのさゞり來るも心得ず叛逆人の詮議とゝ、誰が詮議夫聞ふ、匹夫下郎の分として、天下よ怨する汝が本名知たる子細ゝ此一品、七重八重、花ゝ咲共山吹の、みの一つだよなきぞ悲しき、此簑覺が有ふがな、諏訪明神の力石、出合た横藏珍らしい對面するなア此歌ゝ汝が先祖、太田道

觀がつらねし一首みの一つだよなきぞかなしきとゝ、足利殿よ、攻落され、美濃國を切取れし、其鬱憤よて義晴公を鉄炮よて、打奉る叛逆人の張本、美濃國の道三と、顯ゝす簑ゝ身の破滅、最前打たる鉄炮の術、覺し者ゝ汝一人、我と我身の白狀明白、あらがふな齊藤と、大地を見ぬく詞の石火矢、三人中へ取込て、何と〳〵ときめ付れゞ、ほく〳〵と打默き、岡さが道ゝ武田の軍帥と呼る〻勘助よく見付た、我先祖道觀ゝ、謙信の先祖上杉が鎗先よかゝつて死たる限の元ゝ足利の武將、たよつて殺さん其爲よ、北條氏時よ賄賂し、心を合せやす〳〵と、義晴ゝ打たれ其忘筐の松壽丸、けふ此館へ來るゝ幸、奪ひ取て人質とし、謙信信玄氏時をも皆殺し、一天四海を掌握する此道三、汝等か手よゝいつかな〳〵、義晴を殺した鉄炮でなをやめに前もぶち殺した、松壽丸を是へ出し、降參せよと睨付る、ホゝ根强く仕込し謀叛人、かゝる危き敵の中へ、足利の公達がふか〳〵と來り給

んや、松壽丸のに入と、偽り來たん此湖助、最前鉄砲よて、打れ給ふ、たをやめに前のに死顔、とくと拜見仕れと、投出す女の切首、追取てよく見れば、やはてこりや娘濡衣か、こハくいかよと顛動半亂、口惜や奇怪や、數十年の鬱憤を、一時よ散せんと思ひしよ、勝頼が恩よ引されて、敵方へ卷込れ、大望有此親よ、よくも不覺を取せしな、よつくい女が死ぎまやと、首を打付、齒ぎしみ齒切、そゝぐ涙ん諏訪の海一度よとくるごとく也、返らぬ諍絶躰絶命尋常よ繩かゝれと、兩人一度に立かゝる、物ゝし道三が、死物狂ひと立上る、弓手の脇坪はつしと射る、白羽の矢先ん長尾謙信威風烈しき眼中よ、道三どつかと座を組で、引拔鎌我腹よ、ぐつと突立目を見開き、先祖ゟ遺恨有上杉が子孫、謙信の矢先よかゝるん、我運命の盡る所、本國を切取れ、美濃一つだよなかりし無念美濃尾張兩國を從へ、ついよん國家を握らんと思ひしが、我身の終りと成たるか、及ぬ望よ足利の、武將

を打たる其天罰、信玄謙信中あしく見せかけしも、我を見出す計略とゝ今迄去らざる心の淺はか最期よ魂改る此世の餞別、北條が城廓の案内ゝ、某具よ傳へヤさん、元來相州小田原の城、堀深ふして塀高く、要害の名城なれバ、輙ゝ落べからず、霞晴たる時節を窺ひ、箱根山ゟ見下せバ、敵地の擣能知べし、其時よ謙信が家の軍法細作の、犬を入置後ゟ、謀助是よと切て出、放火を相圖よ甲斐越後、諸軍一度よ矢先を揃へ指詰、引詰射ならべさしも堅回の城也共、直よ乘取氏時が首を巷よさらさんゝ道三が老後の思ひ出、さらバ〳〵と引廻す、心も清き武士の死ても殘す名の譽家の譽と法性の、今ぞ兜を甲州へ、戻す兩家の確執も、納る婚禮三〳〵九度、勝色見する紅梅の色有勝頼、勇有景勝道三が、仇も恨も晴渡る諏訪の湖歩渡り、夜も去のゝめよ明渡る、甲斐と越後の兩將と其名を、今よ殘しける

○第五

甲斐越後兩家の戰ひ、四度の軍術牛角よて、勝負一時よ決せんと劒の刃音鯨波山河も、うごく計なり、かゝる所へ北條氏時村上左衛門義清、軍兵數多引連て暫しと石よ腰打かけ、コレ〳〵村上、某が思ひの通兩家の滅亡今此時、なんと村上味いでないかと、人喰馬よ相口の左衛門、ハア、いか樣おつゑ、やる通り、此所が双方の戰場、兩人ながら籠の鳥、必氣遣ひ仕給ふなと、詞計ハ達者でも脚ハがた〳〵胴ぶるひ、軍兵共口〻よ、アレ〳〵爰へ數多の人音、暫く是へと森の内、かゝりし所よ武田信玄、勝頼、彈正引連團扇打ふりの給いく、只今の注進ハ必定味方の勝軍、此勢ひを失ふべからず、急げ〳〵と血氣の大將、兩人ハ、はつと領掌白毛の駒轡をはゞしてかけ出る、思ひも寄ぬ眦かげ〻、長尾謙信是よ有、見參やつと呼ハる勢、雲よ羽を伸龍虎のいどみ、馬も達者乘人も達者、眞一文字よ乘かけ〳〵眞額二つと切付る打刀、信玄透さず軍配團よはつしと受留、引ゞ付入受身の勝、謙信

呉子が秘術を盡せば、信玄孫子が心をひねり、兩方牛角の大將、自身の働生死の境目ぎましくも又危けれ、信玄猶も床几をさらず又打込を團の拂ひ、かゝる折からかけ來る高坂彈正、山城が是ゝと驚立寄べどつと寄くる北條勢右往左往よなぎ立〳〵追廻し跡を慕ふて、かけり行、又もかけくる信玄が謙信やらぬと打かゝる、こゝ〳〵いかよと双方を見れば寸分かゝらぬ信玄、以前の信玄兜を脱捨、誰かゝ去らね共、我よかゝらんと思ふ志ゝ忝なけれど、所詮運を天よ任せし此兩人、謙信おくれしか、勝負せよと有ければ、こなたの信玄兜を脱ぐ山本勘助、二人が中よわつて入、其お詞ゝ重けれど此勘助が察するよゝ、彼兩人共よ國家の爲よ此軍、北條村上を討亡さんとの謀、とくゝ知て某が五百騎の勢を廻し、兩人共よ早搦捕たり、ヤア〳〵兩人氏時村上を引れよと詞の中武田四郎勝頼、長尾、三郎景勝兩人を引すへさせ、天下を騒す極悪人思ひしれと兩人を、指

廿四

通し〳〵凱歌上て都入、嫁入國入惡人退治、天一天上先勝の二人の大將
二人の彈正、名を末代よ山本氏に代ばん、せいとぞ祝ひける

明和三年
丙戌正月十四日

本朝廿四孝終